HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲルマン語の歴史と構造 (3) : ゲルマン祖語の特徴 (2), 古ゲルマン諸語 (1)
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 135, 41(左)-88(左)
Issue Date	2011-12-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/47700
Type	bulletin (article)
File Information	ARCS135-3.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 135 (2011)

ゲルマン語の歴史と構造 (3)
── ゲルマン祖語の特徴 (2)，古ゲルマン諸語 (1)──

清　水　　誠

Structure and Development of the Germanic Languages (3)
── General Characteristics of Proto-Germanic (2),
Older Germanic Cognates (1) ──

(*The Annual Report on Cultural Science* No. 135. Graduate School of Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2011. ISSN1346-0277)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

2.9. 名詞類の格変化 ── 8 格組織から 6 格組織，そして 4 格組織へ

名詞の話題に移ろう。まず，文中での役割を示す「格」(case) を取り上げる。分岐直前の印欧祖語は，語形変化による 8 格組織を発達させていたとされている[1]。主語を表す「主格」(nominative)，文構造に関与しない点で特殊な呼びかけ「…よ」に用いる「呼格」(vocative)，直接目的語や方向を表す「対格」(accusative)，間接目的語や受益者・目的を表す「与格」(dative)，名詞句内の関係の充足や部分の意味を表す「属格」(genitive)，道具・原因「…で，によって」を表す「具格」(instrumental)，分離・起源「…から」を表す「奪格」(ablative)，場所(時点)「…のところで(ときに)」を表す「所格」(locative)

[1] 方向を表す「向格」(方向格，allative) を加えれば 9 格組織だが，これは対格に吸収されて消滅しつつあった。ヒッタイト語には向格が唯一，残っている。大城/吉田(1990：31) 参照。なお，上記の格の役割は大まかな説明にすぎない。

がそれである。ゲルマン祖語は与格が奪格と所格を吸収して，6 格組織になった。

その後，呼格が主格に取り込まれ，与格は具格も吸収し， 4 格組織に近づいていった。アイスランド語では今でも kasta steinum「石を（steinum）投げる（kasta）」という。この steinum は単数主格 steinn の複数与格で，「石を使って投げる動作をする」の意味である。ドイツ語では前置詞 mit「…で」を用いて，mit Steinen werfen「石を（mit Steinen）投げる（werfen）」という。一般に与格の用法は複雑だが，これは歴史的理由として， 3 つの格を吸収した事情とも無縁ではない。なお，ゴート語では呼格が一部の名詞の単数形で，ほぼ対格と同形で保たれていた（2.11.の変化表参照）。具格も西ゲルマン語の古語と同じく，一部の代名詞に残っていた。たとえば，英語の why は what（＜古英　hwæt）の具格形（古英　hwȳ/hwī「何によって」）に由来する。

印欧	主格	呼格	対格	与格	奪格	所格	具格　属格
				↘	↓	↙	
ゲ	主格	呼格	対格	与格		具格	属格
	↘	↙		↘		↙	
	主格（呼格）		対格	与格（具格）			属格

この変化は，特定の意味を表す格を他の格に吸収させ，前置詞で代用して，語形変化による格を統語的機能を表すものに限定した結果といえる。主格，対格，与格，属格の 4 格組織はアイスランド語やドイツ語に見られる。ただし，アイスランド語では，主格 stein***n***（＜*stein-***r***＜ゲ *stain-a-***z***）「石」―対格 stein―与格 stein***i***―属格 stein***s*** のように名詞が変化するが，ドイツ語では ein Stein（英 a stone）―ein***en*** Stein―ein***em*** Stein―ein***es*** Stein***s*** のように，格表示が冠詞などの「限定詞」（determiner）に大幅に移行している。アイスランド語は不定冠詞を発達させていないので，ドイツ語の ein Stein「石が」の代わりに steinn としかいえず，名詞の語形で区別する必要性が高い。

英語などでは，代名詞の一部で主格と目的格を区別するだけに簡素化され，属格もいわゆる「群属格」(group genitive，例．the writer of the book's aim「その本の著者の意図」）を許すなど，格としての性質が希薄である。

2.10．名詞の「性」── どうしてこんなものがあるのか

英語に続いてドイツ語を学び始めると，だれでもいやになることがある。まず，すべての名詞に文法的な 3 つの「性」（文法性，gender「ジェンダー」）の区別があること，もうひとつは複数形がやたらに多いことである。ただし，これにはれっきとした歴史的理由がある。

まず，性の話から始めよう。たとえば，ドイツ語には d***er*** Wein「ワイン」は「男性」（masculine)，d***ie*** See「海」は「女性」（feminine)，d***as*** Buch「本」は「中性」（neuter）のように，物事を表す名詞にも 3 性の区別がある。これは男の人・女の人・物事という「自然性」（sex「セックス」）とは関係がない。たいていは機械的に覚えるしかなく，定冠詞などの限定詞が d***er***/d***ie***/d***as*** のように変化するので，無視できない。ただし，大多数の印欧語にはこれと似たような文法的な性の区別がある。それを失ったのは，歴史的に大きな変化を被った英語やアフリカーンス語，ゲルマン語以外ではアルメニア語，ペルシャ語くらいしかない。このさい思いっきりあきらめよう。名詞の性はいかにも不要なようだが，それだけ深く言語構造に根づいているともいえる。

性の起源は非常に古く，言語間の不一致が著しい。アイスランド語では，vín***ið***「ワイン」は中性，sjór***inn***「海」は男性，bók***in***「本」は女性のように，ドイツ語の対応語からは見事にずれている（-ið/-inn/in は定冠詞)。ところで，印欧祖語の古い段階では，名詞の性は「有生」(animate) と「無生」(inanimate) という自然性による素朴な意味的対立が基本だったらしい。有生には生物としての男性と女性が含まれる。ヒッタイト語に代表されるアナトリア語派は，起源には異論があるが，基本的に「有生～両性 (common)」↔「無生～中性」の 2 性組織だった。

格組織も印欧祖語の古い段階では，上記の 8 格組織とは大きく異なっていたと考えられている。たとえば，文構造の要(かなめ)である主語を表す主格と目的語

を表す対格を例に取ると，ヒッタイト語では無生名詞は他動詞文の主語になることはなかった。さらに，印欧祖語では，無生名詞は他動詞の目的語か自動詞の主語に限られていたとも推定されている。つまり，「何が彼女をそうさせた」という表現はいかにも「バタ臭い」日本語のようだが，本家のヨーロッパでも大昔はエキゾチックで「味噌臭く」聞こえた時代があったらしい。ほかにも，呼格と与格は有生名詞，所格と具格は無生名詞だけに用いる傾向が強かった。その後，有生名詞からは男性名詞，無生名詞からは中性名詞が発達した。中性名詞は古今東西の印欧諸語に共通して主格と対格が同形である。これは物事を主格にできる時代になって，対格（ギ -on/ラ -um↔主格：ギ -os/ラ -us）を主格に転用したことによる。古くは中性名詞には主格形がなかったのである[2]。

聖書によれば，神はイヴをアダムの胸の骨から創り給うたというが，印欧祖語では女性名詞は抽象概念を表す接尾辞（印欧 -eh$_2$/-h$_2$＞-ā/-a＞ゲ ō）を中性，すなわち無生名詞に付加した集合名詞として生まれた。この接尾辞は中性名詞の複数形にも用いられた。「美しさ」とは，美しい事例の集合から得られる概念というわけである。これを有生名詞に付加すると，生物としての女性を指すようになった。現代語でも，抽象名詞には接尾辞による派生語を含めて，女性名詞が多い。ギリシャ語では中性名詞の複数形が主語になっても，定動詞は単数形のままである。これはサンスクリットやヒッタイト語でもそうである。中性名詞の複数形は数（すう）という文法範疇に取り込まれず，集合名詞にすぎない時代があった。大昔は，性・数（すう）・格という文法範疇は形態的に融合せず，独立のモジュールを形成していたのである。

2.11. 双数と複数 ── 複数形は単数形である!?

第 2 の悩みの種である複数形に移る前に，双数について一言しよう。印欧

[2] 松本 (2006：44-59) 参照。さらに，主格，対格などの語尾そのものも，最初期の印欧祖語では他の格からの転用や二次的な派生で発達したと考えられている。マルティネ（神山訳 2003：212 pp.），Martinet 2004 (1986): 181pp.），松本（2006：77-100）参照。

祖語には単数と複数のほかに，一対のペアを示す双数があった。「２」という数は人間の生活にとって特別な意味がある。身体部位の多くは２つ備わっているし，恋人や夫婦も２人が基本であって，それ以上になると何かとやっかいである。印欧祖語では双数が人称代名詞だけでなく，名詞や動詞にも再建されるが，ゲルマン祖語では衰退しつつあった。ゴート語では３人称で消滅し，１・２人称の代名詞（wit/*jut（推定形）「{私たち/あなたがた} ２人」（主格形，以下同様)）と動詞の一部の変化形にしか残っていない。その他の古語では複数に取り込まれて消滅した。これは wi-「私たち」＋t(wai)「２人」という複合形に由来する。古英語（wit/ġit）や古ノルド語（vit/þit）では，双数は１・２人称代名詞にしか見られない。現代語では北ドイツの北フリジア語に残っており，最北端のジュルト島（ド Sylt）のセルリング方言（北フ Sölring）には３人称の語形もある（セ wat/at/jat「{私たち/あなたがた/彼(女)ら} ２人」)[3]。

それでは，複数形の話題に移ろう。これは名詞の性と微妙に関連している。じつは，大昔，名詞には性の区別にゆるやかに対応しながら，それとは別のクラスがあった。ウムラウトの有無も混ざったドイツ語の「無語尾型，e- 型，(e)n- 型，er- 型」という複数形語尾は，そのなごりなのである。本来，これは複数形とは何の関係もなかった。私たちが複数形だと思っているのは，古くは単数形だったのである[4]。

日本語では「富士山，琵琶湖，信濃川」のように，地名に「山，湖，川」などの「類別詞」(classifier) がつくことが多い。ゲルマン祖語の名詞の大多数は印欧祖語と同じく，この種の要素を義務的に伴っていた。動詞の語形変化に似て，いわば「富士」は語根，「山」は語幹形成接尾辞にあたり，性が決まる。これに数や格を表示する語尾をつけると，語としての姿が完成する。

---

[3] アイスランド語の１・２人称代名詞複数形 við/þið や上部ドイツ語バイエルン方言の２人称代名詞複数形 ees も双数形に由来する。バイエルン方言では本来の２人称代名詞複数形 ià も用いるが，アイスランド語では，本来の１・２人称代名詞複数形 vér/þér とかつての所有代名詞１人称複数形 vor は雅語になっている。

[4] ドイツ語で外来語に多用する「s- 型」は除外する。

ところが，語根と語尾にはさまれた語幹形成接尾辞の多くは，歴史的発達の過程で摩滅してしまった。アイスランド語とフェーロー語ではある程度わかるが，それでも見えにくい。本来の語尾にも摩滅したものが少なくない。話をわかりやすくするために，日本語の「富士山が」と強引に結びつけて，英 day/days，ド Tag/Tage「日」にあたる語形で例示してみよう。

		語幹	（＝［語根	＋語幹形成接尾辞］）	＋語尾
		富士山が	←［富士	＋山］	が
単数主格	印欧	*$d^h eg^{wh}$os	←［$d^h eg^{wh}$-	＋-o-］	-s
	ゲ	*đaǥaz	←［đaǥ-	＋-a-］	-z
	ゴ	dags	←［dag-	＋-ゼロ-］	-s
複数主格	印欧	*$d^h eg^{wh}$oes	←［$d^h eg^{wh}$-	＋-o-］	-e-s
	ゲ	*đaǥõz	←［đaǥ-	＋-õ-＜印欧 -ō＜-o-e］	-z
	ゴ	dagōs	←［dag-	＋-ō-］	-s

ゲルマン祖語の単数主格*đaǥ***a**z が示すように，この語の語幹形成接尾辞は -a-（＜印欧 -o-）である。フィンランド語への借用語 kuning***a**s「王」（＜ゲ *kuning***a**z）の-a-もそうである。これを「a-語幹」（印欧祖語では「o-語幹」）といい，性としてはこの例のような男性（ゲ -az＜印欧 -os，ギ -os，ラ -us）のほかに，中性（ゲ -a＜-a^n＜印欧 -om，ギ -on，ラ -um）が含まれる。ゴート語は語末音節の短母音を失ったので，単数主格 dags は -a- を欠いている。複数主格については，ゲルマン祖語では複数を表す語尾 -e- が語幹形成接尾辞と融合して -õ-＞-ō- となり，主格語尾の -s（＜ゲ -z）から語幹を隔てている。これは祖語の段階で，文法的形態素と意味の対応が 1 対 1 の「膠着的」（agglutinating/agglutinative）な性質から 1 対多の「屈折的」（inflecting/inflectional）な性質に移行したことを示している。

ゲルマン祖語には，およそ次の語幹形成接尾辞による語幹の区別があった。なかでも母音語幹と「n- 語幹」の 5 つがおもなものである。「n- 語幹」以外の子音語幹はマイナーで例が少ない。

① 母音語幹（vocalic stem）
　a- 語幹（a-stem，男性・中性＜印欧 o-stem）
　ō- 語幹（ō-stem，女性＜印欧 ā-stem）
　i- 語幹（i-stem， 3 性共通（中性少数））
　u- 語幹（u-stem， 3 性共通（中性・女性少数））
② 子音語幹（consonant stem）
　n- 語幹（n-stem， 3 性共通（中性少数））
　ter- 語幹（ter-stem，男性･女性の親族名称＜印欧 -r-「r- 語幹」（r-stem）
　nt- 語幹（nt-stem， 3 性共通）
　ir- 語幹（ir-stem，中性＜ゲ -iz-＜印欧 -es-「s- 語幹」（s-stem））

J. グリムの命名に従って，動詞の場合のように，「n- 語幹」による語形変化を「弱変化」（weak declension），その他を「強変化」（strong declension）という。この区別は 2.13. で述べる形容詞の変化にも関係している[5]。英語では「語幹形成母音」（幹母音）を thematic vowel というので，「母音語幹名詞」（幹母音型名詞，thematic noun）にたいして，子音語幹名詞は「非語幹母音名詞」（非幹母音型名詞 athematic noun）とも呼ばれる。

ドイツ語では無アクセント音節の a［ア］，ō［オー］，i［イ］，u［ウ］があいまい母音 e［(弱い）エ ə］に弱化し，現代語の「e- 型」に融合した。複数形では「e- 型」の一部と「er- 型」に，G***ä***ste←G***a***st「客（男性）」（英 guest），Kr***ä***fte←Kr***a***ft「力（女性）」（英 craft「技術，仕事」＜「力，熟練」），L***ä***mm***er***←L***a***mm「子羊（中性）」（英 lamb）のようなウムラウトを示す語がある。これはかつての母音 i を含む「i- 語幹」（＜古高ド g***e***st***i***←g***a***st，kr***e***ft***i***←kr***a***ft）と「ir- 語幹」（＜古高ド l***e***mb***ir***←l***a***mb）に由来するためである。ただし，類推によって他の語幹に入れ替わることがあり，すべての複数形がかつての姿に忠実なわけではない。フィンランド語に借用された lamm***a***s「子羊」は

[5] 女性名詞をつくる「ī- 語幹」（ī-stem）やいわゆる「語根名詞」（root noun）などは割愛する。

母音 a を示しているが，これはゲルマン祖語で「a- 語幹」（ゲ *lamb***a**z）から「ir- 語幹」（ゲ *lamb***i**z）に移行する前の段階を表している。「天狗岳」から「天狗山」に改名したと思えばいいだろう。別の例を挙げると，「a- 語幹」の中性名詞の複数形は，語尾と語幹形成接尾辞が摩滅して単数形と同形になってしまうことが多かった。そこで，中性専用で子音で終わる少数派の「ir- 語幹」を複数形の目印に転用した。その結果，「ir-語幹」はウムラウトを伴い，中性名詞複数形の形成手段として生産性を獲得した。ドイツ語の Wort「語」（英 word）に Wort***e***「名言，談話」（a- 語幹）と W***ö***rt***er***「（個々の）語」（ir- 語幹）があるのは，その一例である。

名詞の複数形がごちゃごちゃしているドイツ語にたいして，どうして英語の複数形はほとんどスッキリ -s で終わるのだろうか。それは，英語では本来の複数形語尾 -s（＜ゲ *-z）が保たれ，後の時代に語幹形成接尾辞が摩滅したためである。逆に，ドイツ語では複数形語尾が早い時代に失われ，何種類にも分かれる語幹形成接尾辞が残った。詳述は省くが，英語の複数形は強変化男性名詞の複数形語尾 -s が一般化されて，-(e)s（＜古英 -as）で終わるようになった[6]。一方，ドイツ語では語幹形成接尾辞が複数形として再解釈された。ドイツ語の Tag「日」（英 day）はかつての語根，Tage（英 days）はかつての語幹にあたり，古くは複数形ではなかったのである。

	語幹（＝[語根＋語幹形成接尾辞]）＋語尾				
英	day	←[day ＋ゼロ]＋ゼロ＜古英		dæġ	←[dæġ＋ゼロ]＋ゼロ
	days	←[day ＋ゼロ]＋s	＜	dagas	←[dag ＋a] ＋s
ド	Tag	←[Tag＋ゼロ]＋ゼロ＜古高ド		tag	←[tag ＋ゼロ]＋ゼロ
	Tage	←[Tag＋e] ＋ゼロ＜		taga	←[tag ＋a] ＋ゼロ

ドイツ語では Frau「女性」，Kind「子供」の複数形は Frau***en***，Kind***er*** と

[6] 名詞複数形語尾 -s の保持を北海ゲルマン語の特徴に数える意見もある。Markey（1976：51 ff.）参照。

なる。これは子音語幹の中で主要語幹に属する「n- 語幹」および新たに生産性を得た「ir- 語幹」の例である。英語の child（＜古英 ċild）の複数形 child***ren***（＜古英 ċild(ru)＋-(e)n）とオランダ語の kind***eren***←kind は，両方を含む「二重複数」（double plural）と呼ばれる。さて，-(e)n/-er は Frau***en***zimmer「閨房，婦人部屋」，Kind***er***wagen「ベビーカー」などの複合語にも現れる。とはいえ，Frauenzimmer は江戸時代の大奥のように多数の美女たちが暮らす空間とは限らず，Kinderwagen には１人しか赤ん坊が乗っていなくてもかまわない。昔は何人も子供を生んだから Kinderwagen だったが，最近ではドイツも少子化が進んで１人乗りが普通になったのかな，などとよけいなことを考えてはいけない。本来は，これも複数形ではなく，語幹形成接尾辞が複合語に残った例なのである。

次に，ゴート語を例に母音語幹名詞の変化を示してみよう。とくに複数与格•対格で語幹が確認できるだろう。子音語幹名詞の変化については，「n- 語幹」の例を 2.13. で示すことにする。

強変化：		a-語幹	a-語幹	ō-語幹	i-語幹	u-語幹
		男性	中性	女性	男性	男性
単数	主格	dags	waúrd	giba	gasts	sunus
	対格	dag	waúrd	giba	gast	sunu
	与格	daga	waúrda	gibai	gasta	sunau
	属格	dagis	waúrdis	gibōs	gastis	sunaus
	呼格	dag	—	—	gast	sunu, sunau
複数	主格	dagōs	waúrda	gibōs	gasteis	sunjus
	対格	dagans	waúrda	gibōs	gastins	sununs
	与格	dagam	waúrdam	gibōm	gastim	sunum
	属格	dagē	waúrdē	gibō	gastē	suniwē

2.12. 複数形語尾とウムラウト ── 音韻規則から形態的手段へ

ドイツ語の複数形語尾は本来，どんな意味を表し，性との関係はどうだっ

たのだろう。性については 2.11. の各語幹の紹介で，対応する性の種類を記しておいた。子音語幹に比べて，母音語幹は性との相関関係が強い。これは母音語幹が子音語幹よりも新しい時代の発達であるためとされている。たとえば，前述のように，「ō-語幹」は抽象名詞を派生する印欧祖語の接尾辞 -ā（＞ゲ -ō）に由来するので，女性名詞（例．ゴ giba「贈り物」）である。「a- 語幹」には残りの男性名詞（例．ゴ dags「日」）と中性名詞（例．ゴ waúrd「語」）が含まれ，「ō- 語幹」と相補分布をなしている。「i- 語幹」は 3 性共通だが，男性名詞（例．gasts「客」）と女性名詞（例．ゴ mahts「力」，英 might）が多い。3 性を含む「u- 語幹」（例．男性：ゴ sunus「息子」（英 son），中性：ゴ faíhu「財産，金」（英 fee），女性：ゴ handus「手」（英 hand））と「n- 語幹」（男性：guma「男」（英 human＜ラ homō），中性：haírtō「心臓」（英 heart），女性：qinō「女」（英 queen））では，中性名詞の例が少なく，前者は女性名詞も多くない。他の子音語幹名詞はマイナーで例が少ない。

意味との関係についてはどうか。まず，「ō- 語幹」の多くは当然ながら抽象概念を表す。子音語幹では，「nt- 語幹」は「…しつつある」という意味の動詞の現在分詞（ド -nd＜古高ド -nt）の名詞化に由来する。英語の friend「友」とドイツ語の Feind「敵」は，ゴート語の動詞 frijōn「愛する」，fijan「憎む」の現在分詞 frjōnds「愛している者」と fijands「憎んでいる者」を原義とする「nt- 語幹」である。英語の ox***en***「雄牛」（←ox）や childr***en***「子供たち」は，「n- 語幹」の語幹形成接尾辞 -en- をドイツ語のように複数形語尾に再解釈した語形である。ともに使用頻度が高かったために類推を免れ，多数派の語尾-s によらずに定着した。一方，「nt- 語幹」は単数形で語幹形成接尾辞を保ったが，英語では friend***s***「友人たち」のように多数派の語尾 -s を付加し，ドイツ語では Feind***e***「敵たち」（＜古高ド fīant***a*** ← fīant）のように多数派の「a- 語幹」に由来する「e- 型」に移行した。

意味的に最も明確なのは「ter- 語幹」（英 -ther/-ter，ド -(t)ter/-der）である。これは 5 つの親族名称，英 fa***ther***/ド Va***ter***「父」，mo***ther***/Mu***tter***「母」，bro***ther***/Bru***der***「兄弟」，sis***ter***/Schwes***ter***「姉妹」，daugh***ter***/Toch***ter***「娘」，それに Vater「父」から派生したドイツ語の Ve***tter***「男のいとこ」

(＜叔父)」からなるグループである。類型論的に見ると，名詞には「親族・固有＞人間＞動物＞無生物」といった意味的階層があるとされている。親族名称は人間生活で最も重要な名詞で，最も上層に位置し，特殊なクラスを形成しやすい[7]。語形変化でも，ギリシャ語，ラテン語，それにゲルマン語ではアイスランド語に共通して，「父」などの男性名詞と「母」などの女性名詞の間には差がない。つまり，性の区別すら形態的に反映されない特殊なグループなのである。「ter- 語幹」の語幹形成接尾辞は親族名称の目印として単数形でも摩滅せず，保持された。father/Vater「父」，mother/Mutter「母」に対応するギリシャ語 patḗr/mḗtēr とラテン語の pater/mater は，英語の pa「パパ」/ma「ママ」を連想させる幼児語の呼びかけ（印欧 *pā(?)/*mā）に由来するともいわれる。英語やドイツ語でも，単数形で語根に -ther/-ter がついた語幹全体を保ったのである。

ただし，親族名称は数(すう)の区別には敏感である。「あなたには別のお父さんがいるのよ」などと告げられたら，だれでもドキッとする。しかし，語幹形成要素 -ther/-ter は単数形に含まれており，複数形語尾には使えない。そこで，英語では類推によって多数派の -s を援用した。ところが，ドイツ語ではあいまい母音 e［ə］を含む -ter/-der に -e を重ねるのは音韻構造に適さず，多数派の「a- 語幹」と「ō- 語幹」に由来する「e- 型」には移行しなかった。そこで次の手段が取られた。

① ウムラウトによる複数形：V***a***ter「父」→V***ä***ter, M***u***tter「母」→M***ü***tter, Br***u***der「兄弟」→Br***ü***der, T***o***chter「娘」→T***ö***chter

② 「n- 型」による複数形：Schwester「姉妹」→Schwester***n***, Vetter「男のいとこ」→Vetter***n***

[7] ただし，英 son/ド Sohn「息子」を除く。英 aunt/ド Tante「叔母(おば)」，uncle/Onkel「叔父(じ)」などはフランス語からの借用である。名詞の階層については角田（1991：39 ff.）参照。

それはウムラウトと主要な子音語幹である「n- 語幹」の「無断な転用」だった。ウムラウトは後続音節の -i/-j を条件とするが，無アクセント音節があいまい母音 e［ə］に弱化していた時代に，その縛りは解けていた。こうしてドイツ語の親族名称の複数形は，ウムラウトできる母音 a，o，u を持つ語は本来の理由とは無関係にウムラウトし，できない語は「n- 型」に移行して，数（すう）の区別を明示する道を選んだ。ウムラウトは機械的な音韻規則から脱皮し，類推によって形態規則としての新たな役割と生産性を獲得したのである。

2.13. 形容詞の強変化と弱変化 ── なぜ 2 通りに変化するのか

ドイツ語学習者のさらなる悩みの種は，形容詞が名詞を修飾する「限定用法」（attributive use）で 2 通りに変化することである。たとえば，gut「良い」（英 good）は gut***er*** Wein「良いワイン」（英 good wine）にたいして，der gut***e*** Wein「その良いワイン」（英 the good wine）のように，-er（強変化）/-e（弱変化）という 2 通りの語尾を伴う。この現象を一般に「一致」（agreement）という。古くは日本語の形容詞も，連体形の「高キ山」は終止形の「山，高シ」とは異なっていた。ドイツ語の形容詞も，かつては終止形にあたる「叙述用法」（predicative use）で主語の名詞句に「一致」して変化していた。ただし，現在では Dieser Wein ist gut.「このワインは良い」（英 This wine is good.）のように無変化になっている。これは英語を除く西ゲルマン語に共通している。一方，北ゲルマン語の形容詞はロマンス語やスラブ語と同じく，叙述用法と限定用法の両方で変化する。つまり，名詞に関係する場合には，どんな場合にもそれと「一致」して変化する[8]。ただし，語尾はドイツ語と同様に，叙述用法では 1 種類なのに，限定用法では 2 種類ある。アイスランド語を例に取ると，叙述用法 Þessi bjór er góð***ur***.「このビール（bjór 男性）

[8] ただし，西ゲルマン語では，イディッシュ語のように形容詞が不定冠詞を伴うなどして名詞化した場合を除く（イ Dos bux iz {*gut/a guts*}.「その本は（dos bux）{良い（iz gut，英 is good）/良いものだ（iz a guts，英 is a good one）}」）。北ゲルマン語の形容詞は動詞を修飾する「副詞用法」（adverbial use）では中性単数形になる。これは関係する名詞との一致を欠いたデフォルト形態ととらえられる。

は良い」（英 This beer is good.）の góð***ur***「良い」はドイツ語と違って変化し，語尾は 1 種類だが（-ur は強変化・男性単数主格語尾），限定用法では góð***ur*** bjór「良いビール」（英 good beer），góð***i*** bjórinn「その良いビール」（英 the good beer，-inn は定冠詞の男性単数主格形）のように，2 通りの語尾 -ur（強変化）/-i（弱変化）に分かれる。限定用法の 2 種類の語尾は他の印欧諸語にはないゲルマン語の革新だった。そのメカニズムとは何か。

日本語の形容詞は名詞の仲間を指す「体言」にたいして「用言」といい，動詞の仲間だが，印欧語の形容詞は冠詞，代名詞，数詞とともに名詞の仲間で，「名詞類」（nominal）と呼ばれる。英語の形容詞には，the old「高齢者たち」（人・複数扱い），the beautiful「美，美しいもの」（物事・単数扱い）のように名詞に相当する用法もある。ドイツ語では ein Alter「あるひとりの男性高齢者」，Alte「高齢者たち」，das Alte「その古いもの」など，性・数（すう）に応じて細かく表現できる。また，英語やドイツ語の形容詞には，動詞に準じた叙述用法よりも名詞句内の限定用法で使うものが多い。意味的にも名詞の属格のように，他の名詞との論理的関係を表すことがある。英語の paternal「父親らしい」やドイツ語の mütterlich「母親らしい」には，名詞表現と紙一重の「父の」（英 father's/ド des Vaters），「母の」（英 mother's/ド der Mutter）の意味がある。この意味では，英 paternal grandfather「父方の祖父」/ド mütterliches Erbe「母からの遺産」のように限定用法では使えても，英 ×Her grandfather is paternal.「彼女の祖父は父方だ」/ド ×Dieses Erbe ist mütterlich.「この遺産は母方のものだ」のように叙述用法で使うと不自然になる[9]。

さて，ドイツ語をはじめとする西ゲルマン語において，形容詞が限定用法で語尾を保持した理由は，納得がいくだろう。「山，高シ」では「山」と「高シ」の間に切れ目があるが，「高キ山」はひとまとまりである。der gut***e*** Wein の -e には形容詞と名詞をつなぎ，名詞句のまとまりを示す「テープ」の役目がある[10]。一方，gut***er*** Wein の-er は男性単数主格も表している。gut***er***［グー

[9] 非文法的な文には「*」の代わりに「×」をつけ，推定形「*」から区別する。

[10] 橋本（1981：153，394）はこの機能を「シンタグマ・マーキング」（syntagma-makring）

ター 'guːtɐ］では，定冠詞 d***er***［デア dɛɐ̯］（←指示代名詞 der［デーア 'deːɐ̯］「（強く指示して）その」）の語幹 d-（指示的要素）を除いた語尾 -er［エア ɛɐ̯］を無アクセント音節で弱め，-er［アー ɐ］として gut に付加している。限定用法の形容詞語尾はこの 2 つのはたらきをしているのである。

フランスの印欧語学者メイエ（Antoine Meillet 1866〜1936）は名詞の文法的な性の役割として，「名詞句内のまとまりをマークする」，「代名詞による名詞句との照応（anaphora）を明示する」という 2 点を挙げている[11]。後者については，上記の強変化語尾 -er［エア ɛɐ̯］が人称代名詞男性単数主格形 er［エーア，エア eːɐ̯，ɛɐ̯］「それ（物事の意味の男性名詞を指す），彼」にも現れることからも理解できる。英語では北海ゲルマン語的特徴として語末の -r を失い，指示的要素の h- を伴って自然性専用の he になった。女性と中性でも同じことがいえる。表にまとめてみよう。

男性　d***er***［デア dɛɐ̯］Wein「そのワイン」（←指示代名詞 der［デーア 'deːɐ̯］「（強く指示して）その」，d- は指示的要素）

gut***er***［グーター 'guːtɐ］Wein「良いワイン」（-er［アー ɐ］＜-er［エーア eːɐ̯］）

er［エーア，エア eːɐ̯，ɛɐ̯］「それ，彼」（語頭の指示的要素なし）

女性　d***ie***［ディー diː］Milch「その牛乳」

gut***e***［グーテ 'guːtə］Milch「良い牛乳」（-e［エ ə］←-ie［イー iː］）

s***ie***［ズィー ziː］「それ，彼女」（s- は指示的要素）

中性　d***as***［ダス das］Wasser「その水」

gut***es***［グーテス 'guːtəs］Wasser「良い水」（-es［エス əs］←-as［アス as］）

es［エス，（エ）ス ɛs，(ə)s］（←-as［アス as］，語頭の指示的要素なし）

と呼んで，類型論的考察を試みている。

[11] Meillet（1948：206 f.）参照。

次に，形容詞の語尾が叙述用法で 1 種類，限定用法で 2 種類あるという事実もそれほど不思議ではない。「良いワイン」では「ワイン」が未知か既知かで形容詞の語形が異なる根拠があるが，「そのワインは良い」では「良い」という概念にその区別はない。上記のアイスランド語の góð***ur*** が示すように，叙述用法の語尾は無冠詞の限定用法の語尾と同形の強変化語尾であり，かつてのドイツ語もそうだった。定冠詞つき限定用法のド der gut***e*** Wein/アgóð***i*** bjórinn の弱変化語尾 -e/-i が変わり者なのである。これは男性単数主格だが，ドイツ語ではその他の変化形で den gut***en*** Wein（対格），dem gut***en*** Wein（与格），des gut***en*** Weins（属格）のように-en が現れる。単数主格と中性単数対格では-n を失い，-e となった。つまり，古くは弱変化語尾は規則的に -n を伴っていたのである。アイスランド語の弱変化語尾はすべて -n を失い，母音で終わるように変わった。

上述のように，子音語幹の名詞で古くから生産的だったのが「n- 語幹」である。ラテン語にも男性 homō「人」，女性 natiō「民族，国」，中性 nōme***n***「名前」などの例がある。単数主格形も-n で終わる中性名詞を除くと，主格以外，すなわち「斜格」(oblique case) では，与格 homi***n***ī「人に」，対格 natiō***n***em「国家を」，属格 nōmi***n***is「名前の」のように，軒並み -n- を示す。英語の nation やドイツ語の Nation は斜格形，オランダ語の natie や西フリジア語の naasje は主格形の借用である。

英語では ox***en***「雄牛」/childr***en***「子供たち」(←ox/child) のような少数派にとどまったかつての「n- 語幹」は，オランダ語や西フリジア語では大多数の名詞に用いる主要な複数形語尾に発達した。しかし，「n- 語幹」の語形変化のパラダイムへの侵入は，すでにゲルマン祖語の段階で接尾辞 -an（<印欧 -on）（>ド -(e)n) として，形容詞の「弱変化」に組織的に実現されていた。それがドイツ語の弱変化語尾 -e/-en の正体である。名詞と同じく，形容詞でも「n- 語幹」による変化を「弱変化」，それ以外を「強変化」という。上述のように，子音語幹に属する「n- 語幹」は 3 性に共通だった。「n- 語幹名詞」の例として，ゴート語の guma「男」(男性，英 human<ラ homō)，haírtō「心臓」(中性，英 heart)，qinō「女」(女性，英 queen) の変化形を形容詞 blinds

「盲目の」(英 blind)の弱変化と比べてみよう。両者の語形変化は同一である。なお，単数の主格と中性対格では -n が脱落している。

弱変化：		男性（n- 語幹）	中性（n- 語幹）	女性（n- 語幹）
単数	主格	gum***a***↔blind***a***	haírt***ō***↔blind***ō***	qin***ō***↔blind***ō***
	対格	gum***an***↔blind***an***	haírt***ō***↔blind***ō***	qin***ōn***↔blind***ōn***
	与格	gum***in***↔blind***in***	haírt***in***↔blind***in***	qin***ōn***↔blind***ōn***
	属格	gum***ins***↔blind***ins***	haírt***ins***↔blind***ins***	qin***ōns***↔blind***ōns***
複数	主格	gum***ans***↔blind***ans***	haírt***ōna***↔blind***ōna***	qin***ōns***↔blind***ōns***
	対格	gum***ans***↔blind***ans***	haírt***ōna***↔blind***ōna***	qin***ōns***↔blind***ōns***
	与格	gum***am***↔blind***am***	haírt***am***↔blind***am***	qin***ōm***↔blind***ōm***
	属格	gum***anē***↔blind***anē***	haírt***anē***↔blind***anē***	qin***ōnō***↔blind***ōnō***

形容詞の変化には，母音語幹の名詞変化と同じ「強変化」もある。ゲルマン語では弱変化との二重構造が浸透し，形容詞は語幹形成接尾辞の区別を放棄して，多数派の「a/ō- 語幹」(ja/jō-を含む，a：男性・中性，ō：女性）にほぼ一本化された。ゴート語でも「i- 語幹」と「u- 語幹」の形容詞は少ない。

ただし，名詞と代名詞の変化は微妙に異なる。形容詞の強変化には指示代名詞の変化が大幅に混入しており（四角 で囲んで示す)，中性単数主格・対格には名詞の変化と指示代名詞の変化による両方の語形がある。形容詞の強変化は，ドイツ語では指示代名詞から発達した定冠詞の変化と一致し（ド d***er*** Wein↔gut***er*** Wein)，ほとんど全面的に指示代名詞の変化に移っている。2.11. で紹介したゴート語の強変化名詞と指示代名詞 sa/þata/þō「それ」(英 that）の変化形を併記してみよう。

強変化：		男性（a-語幹）	中性（a-語幹）	女性（ō- 語幹）
単数	主格	dag***s***↔blind***s***	waúrd↔blind *þ**ata**↔blind**ata***	gib***a***↔blind***a***
	対格	*þ**ana**↔blind**ana***	waúrd↔blind	gib***a***↔blind***a***

			þata↔blindata	
	与格	*þamma↔blindamma*	*þamma↔blindamma*	gib*ai*↔blind*ai*
	属格	dag*is*↔blind*is*	waúrd*is*↔blind*is*	*þizōs↔blindaizōs*
複数	主格	*þai↔blindai*	waúrd*a*↔blind*a*	gib*ōs*↔blind*ōs*
	対格	dag*ans*↔blind*ans*	waúrd*a*↔blind*a*	gib*ōs*↔blind*ōs*
	与格	*þaim↔blindaim*	*þaim↔blindaim*	*þaim↔blindaim*
	属格	*þizē↔blindaizē*	*þizē↔blindaizē*	*þizō↔blindaizō*

これは形容詞の語形変化が「名詞変化＞代名詞変化＞弱変化」という発達を経たことを示している。この発達は「限定」の意味と密接に結びついていた。詳述は避けるが，代名詞には指示的機能があるので，代名詞変化は名詞変化にたいして限定の意味を担っていたと考えられる。ドイツ語の叙述用法の形容詞に代名詞変化が浸透せず，名詞変化を保って無変化（男性単数主格語尾 -s は消失）になった事実は，上述のように限定の意味とは無関係だったことによる。一方，形容詞が名詞を修飾する場合には，代名詞変化が名詞変化を追いやって，「限定」（定 definite）↔「非限定」（不定 indefinite）の区別が希薄になると，指示代名詞そのものを「形容詞強変化＋名詞」に付加して限定の意味を補強するようになった。ところが，この形式は同じ語尾が重なって冗長なために，それまでの強変化を限定の意味を持つ新たに発達した弱変化で置き換えたのである（例．ゴ *þ*amma* blind*amma*「この盲目の男に（男性単数与格）」（強変化代名詞変化＋強変化）＞þ*amma* blind*in*（強変化代名詞変化＋弱変化））。その後，指示代名詞が定冠詞に発達する過程で，弱変化は本来の限定の意味を失って，現在の「{指示代名詞・定冠詞}＋形容詞弱変化＋名詞」と「無冠詞＋形容詞強変化＋名詞」のパターンに至ったと考えられる。

弱変化が限定の意味を保っていたことは，ゴート語聖書の次の例からもうかがえる[12]。

[12] 千種（1983：60 f.），Meillet（1949：183）参照。

① ゴ gōlja izwis ik Taírtius ***sa mēljands*** þō aípistaúlein in fraujin「この手紙を（þō aípistaúlein）書いている（sa mēljands）私（ik），テルティウス（Taírtius）はあなたがたに（izwis）主において（in fraujin）挨拶を送ります（gōlja）」（『ローマ人への手紙』16，22）

② ゴ Ik im hlaifs ***sa libanda***, sa us himina qumana「私は（ik）天（himina）から（us）来た（sa…qumana）生きている（sa libanda）パン（hlaifs）である（im）」（『ヨハネによる福音書』6，51）

斜体字の部分は，指示代名詞男性単数主格形 sa「その」に動詞の形容詞形である現在分詞を加えたものだが，上の表の blind***s***（強変化）↔blind***a***（弱変化）「盲目の」からわかるように，① mēljand***s***「書いている」（← mēljan「書く」）は強変化，② sa liband***a***「生きている」（← liban「生きる」）は弱変化である。ゴート語の現在分詞は強変化するのがふつうだが，①は「手紙を書いている私」という一時的で限定されない行為にたいして，②は「生きているパン」という内在的で固有の性質としての限定の意味を弱変化で表した例といえる。

ドイツ語に見られる弱変化語尾 -(e)n は，古くはたんに名詞句のまとまりを示す「テープ」ではなく，定冠詞に準じる意味を持っていた。「n- 語幹」は「個別化」の意味を表し，「個別化＞唯一性＞限定」と発達したのである。ドイツ語で単数主格以外に -(e)n をつける「男性弱変化名詞」（ド schwaches Maskulinum）には，Herr「主人」，Junge「男の子」，Bär「熊」のように有生名詞が多い[13]。有生名詞は性質や状態などとは異なって，限定された明確な個体の表現といえる。ラテン語の Catō「カトー」（対格 Catō***n***em），ギリシャ語の Agáthō***n***「アガトーン」などの人名は，ゲルマン語の弱変化の「n- 語幹」に相当する印欧語の接尾辞 -on（＞ゲ -an＞ド -(e)n）を伴っている。これは形容詞 catus「賢い」，agathós「良い」（英 good と同源）からの派生名詞で，

[13] 無生名詞　Name「名前」，Wille「意志」などは単数属格で Name***ns***，Wille***ns*** のように，弱変化語尾 -n のほかに強変化語尾 -s も伴う。

「賢さ・善良さの個別的実現」ほどの意味である。Catō はもちろん「加藤」ではなく「賢治」，Agáthōn は「良雄」といった感じである。

印欧祖語と同じく，ゲルマン祖語には冠詞がなかった。ゴート語や初期のルーン銘文にも冠詞はなく，アイスランド語には古典ギリシャ語のように不定冠詞がない。ラテン語やロシア語にも冠詞はまったくない。定冠詞は 2 種類の指示代名詞（ゴ sa/þō）＜印欧 so-/to-;ア -nn＜印欧 eno-），不定冠詞は数詞の「１」から発達した。「n- 語幹」による弱変化は，冠詞や指示代名詞など限定詞を伴う名詞句で「限定」（定，definite）の意味を表す場合に用い，強変化は「非限定」（不定，indefinite）の名詞句に使うようになった。ゲルマン語は「n- 語幹」の持つ限定の意味を任意の形容詞に付与するように，再解釈したのである。

ほかにも，呼びかけでは相手が決まっているので，北ゲルマン語ではアイスランド語の Kær***i*** Jón!「親愛なるヨウン（男名）よ」，Kær***a*** Anna!「親愛なるアンナ（女名）よ」のように弱変化（-i/-a; -n は消失）を使う。形容詞の比較級も特定の対象との相対的関係を表すので，古くは弱変化しかなかった。アイスランド語の形容詞比較級には，今でも特殊な弱変化しかない。ドイツ語では Du Arm***e***!「哀れなやつの君（男・女性）！」，wir Arm***en***「我ら貧者」（arm「哀れな，貧しい」）のように，まぎれもない対象を指す人称代名詞との同格表現には弱変化を使う。これは限定詞と弱変化語尾の共起が名詞句内の重複ではなく，名詞句間の同格表現に由来する可能性を示唆している。

前述のように，ゲルマン祖語の動詞はアスペクトの区別を失った。ロシア語などスラブ語に見られる「完了体」↔「不完了体」という「体（たい）」（＝アスペクト）の区別は，出来事の時間的な「限定」（例．ロ napisat'「書いてしまう（完了体）」）↔「非限定」（例．ロ pisat'「書いている（不完了体）」）の組織的な表現形式といえる。ポーランド人のクリウォヴィチ（Jerzy Kuryłowicz 1895〜1978）は，動詞のアスペクトは名詞につく冠詞のようなものだと述べている[14]。ゲルマン語は出来事の表現である動詞のアスペクトの消失を補うよう

[14] Kuryłowicz（1973²（1960）：110）参照。

に，出来事の関与者である名詞句で限定・非限定の区別を表示するべく，定冠詞にさきがけて形容詞の弱変化を発達させたのかもしれない[15]。

3．古ゲルマン語の仲間たち（再説）── 分類と発達

3.1. 古ゲルマン諸語の分類 ── 3 分類，2 分類，それとも 5 分類？

ここでゲルマン語の古語の仲間たちを改めて紹介しておこう[16]。

(1) (a) **†東ゲルマン語**[17]

① オーダー・ヴィスワ川ゲルマン語：†ゴート語など

(2) 北西ゲルマン語：初期ルーン語[18]

(b) ② **北ゲルマン語**：古ノルド語[19]

古西ノルド語：古アイスランド語，古ノルウェー語

古東ノルド語：古スウェーデン語，古デンマーク語，古ゴットランド語

(c) **西ゲルマン語：**

(i)③ 北海ゲルマン語：

古英語，古フリジア語，古ザクセン語（＝古低ドイツ語，古オランダ語低地ザクセン方言）

(ii) 内陸ゲルマン語：

④ ヴェーザー・ライン川ゲルマン語：古高（＝中部）ドイツ語古フランケン方言，古オランダ語（＝古低フランケン方言）[20]

---

[15] Leiss（2000）では同様の考えかたがくわしく展開されている。

[16] この表は拙稿「ゲルマン語の歴史と構造 (1)── 歴史言語学と比較方法 ──」（2010：4）を部分的に修正して，改めて提示するものである。以下の説明はこの修正版に基づいて行う。

[17]「†」は今日では死語となっていることを示す。北ゲルマン語のフェーロー語とノーン語は古語の文献が乏しいので，割愛する。

[18] 古ルーン文字による言語（200～500 年頃）を指す。5.3. 参照。

[19] 北ゲルマン語の古語を伝統的に「ノルド語」と呼ぶ。

[20]「フランケン」は英語式に「フランク」と呼ぶこともある。一方，「ザクセン」を英語式

⑤ エルベ川ゲルマン語：古高（＝上部）ドイツ語古バイエルン方言・古アレマン方言

古ゲルマン諸語の分類には諸説がある。まず，ゴート語を代表とする「東ゲルマン語」(East Germanic)，スカンジナヴィアの「北ゲルマン語」(North Germanic)，中央ヨーロッパの「西ゲルマン語」(West Germanic) の 3 分類がある。これは紀元後 2 ～ 4 世紀の居住地を根拠とし，初期の印欧語歴史比較言語学を集大成したドイツ人のシュライヒャー（August Schleicher 1821～68) が 1860 年に提唱し，ゴート語聖書の校訂で名高いドイツ人のシュトライトベルク（Wilhelm Streitberg 1864～1925）による 1896 年の命名で定着した。第 1 の目安は，英語の day「日」にあたる男性強変化名詞の単数主格語尾で，東ゲルマン語（ゴ dag***s***）の -s，北ゲルマン語（古ノ dag***r***）のロータシズムによる -r（<-s)，西ゲルマン語（古ザ dag/古英 dæġ/古高ド tag）の無語尾という分布である。

最もよく知られた 3 分類だが，当初から異論も多かった。そのひとつに，ゴート人がスウェーデン南部を故地とするという推定から「ゴート・ノルド語」（ド Gotonordisch）としての「北ゲルマン語」（ド Nordgermanisch）を仮定し，西ゲルマン語を「南ゲルマン語」（ド Südgermanisch）として 2 分類する説がある（後述の北海ゲルマン語は前者か単独)。上記の目安も，語尾の有無で西ゲルマン語を隔てる基準になる。ほかにも，強変化動詞の過去形 2 人称単数語尾 -t（例．ゴ/古ノ nam***t***「(君は) 取った」↔古英 nōm***e***，古高ド/古ザ nām***i***）や硬音化（①ゲ -jj-＞-ddj-/-ggj-，例．ゴ twa***ddj***ē/古ノ tve***ggj***a（数詞「2」の属格)↔古英 tweia/古高ド zweio/古ザ tweio; ②ゲ -ww-＞-ggw-，例．ゴ tri***ggw***s/古ノ try***gg***r (-ggva-)「忠実な」(英 true「真実の」)↔古英 trēowe/古高ド・古ザ triuwi）などの共通点がある。この

に「サクソン」と呼ぶと，英語圏の「アングロサクソン」の意味に限られ，ドイツ語圏の地名や部族名には用いないことが多い。本書では「フランク王国」などを除いて，ドイツ語圏とオランダ語圏にかんしては「ザクセン」，「フランケン」という用語で統一する（厳密には，オランダ語では「サクセン」(オ Saksen）となる)。

説は，ボヘミア生まれでプラハ大学などで活躍したドイツ人のシュヴァルツ（Ernst Schwarz 1895〜1983）が 1951 年に唱えた。しかし，概して瑣末（さまつ）な特徴であり，あまり支持されていない。

次に，３分類の前段階として，北ゲルマン語と西ゲルマン語を「北西ゲルマン語」（Northwest Germanic）にまとめる有力な説がある。共通点としては，後述する長母音 ē（＝$ē_1$ /æ:/[21]）＞ā の変化，ウムラウトとロータシズム，強変化動詞第Ⅶ系列の母音交替の発達など，重要なものが多い。この説によれば，ゴート人は北欧を離れた紀元前 100 年頃には，まだゲルマン祖語を話しており，残りの人々の言語は北西ゲルマン語として共通性を保持し続けていた。それが北ゲルマン語と西ゲルマン語に分岐したのは，５世紀半ばのアングロサクソン人のブリテン島移住と「デーン人」（Danes）のユトラント（ド Jütland「ユートラント」，デ Jylland「ユレン」）半島植民以後の出来事になる。北西ゲルマン語の存在をわずかに伝えるのは，最初期のルーン銘文による初期ルーン語である。この説は，キール大学で活躍したドイツ人のクーン（Hans Kuhn 1899〜1988）がシュヴァルツの説への反論として，1955 年に公にした。

古くから異論が集中したのは西ゲルマン語の扱いである。おもな特徴には，上記の強変化男性名詞単数主格語尾 -z（＞ゴ -s，＞古ノ -r）の消失のほかに，「西ゲルマン語子音重複」（West Germanic Consonant Gemination）がある。j /j/[22]，w /w/，r，l の前で子音の調音が強まって長子音になる硬音化の一種で，子音字を重ねて示す。とくに j /j/の前では規則的に起こった（ゲ *sa***tj**an「置く」（英 set）＞古ザ se***tti***an，古英 se***tt***an，古高ド se***zz***en↔ゴ sa***tj***an，古ノ se***tj***a）。

そもそも西ゲルマン語の古英語と古高ドイツ語の隔たりは，当時の北ゲルマン語内部の相違よりも大きかったといえる。現在では，考古学的観点や古代ローマの歴史家の著述を考慮して，西ゲルマン語は当初から単一ではなく，

[21]「//」は古語の場合は推定音，現代語の場合は音素表記に用いる。

[22] j /j/は英語の jazz の［ジ dʒ］ではなく，yes の［ィ j］を表す。

ローマ帝政期には「北海ゲルマン語」(North Sea Germanic),「ヴェーザー・ライン川ゲルマン語」(Weser-Rhine Germanic),「エルベ川ゲルマン語」(Elbe Germanic) の 3 グループに分かれていたとする見解が一般的である。北海ゲルマン語は「イングヴェオーン語群」(Ingvaeonic) とも呼ばれる。この名称は,タキトゥスの『ゲルマーニア』で言及された北海沿岸地域に居住する「インガエウォネース族」(ラ Ingaevones) に由来する。ゲルマン人が信仰していたとされる神の子の 3 人の息子の名前のひとつにちなんでおり,後述する古ルーン文字の 22 番目の文字名にも見られる。残りの 2 つは,「ヘルミノネース族」(ラ Herminones) をもとにした中部ドイツの「エルミノーン語群」(Erminonic) と「イスタエウォネース族」(ラ Istaevones) をもとにしたライン川右岸地域の「イストヴェオーン語群」(Istvaeonic) で,「エルベ川ゲルマン語」と「ヴェーザー・ライン川ゲルマン語」にあたり,まとめて「内陸ゲルマン語」(Continental Germanic) という。この説はフライブルク大学で活躍したドイツ人のマウラー (Friedrich Maurer 1898〜1984) が 1952 年に唱えた。

北海ゲルマン語には古英語,古フリジア語,古ザクセン語が含まれる。ヴェーザー・ライン川ゲルマン語はフランケン人[23],ヘッセン人などによる中部ドイツ語,それにオランダ北東部を流れるエイセル川以南の低地フランケン地方のオランダ語の母体である。エルベ川ゲルマン語はアレマン人,バイエルン人,ランゴバルド人などを話者とし,ドイツ語圏の南部高地地方にあたる上部ドイツ語の先駆けである。中世初期の中部および上部ドイツ語は古高ドイツ語に含まれ,標準ドイツ語の母体である高地ドイツ語に連なっている。この立場からすると,東ゲルマン語は「オーダー・ヴィスワ川ゲルマン語」(Oder-Vistula Germanic) と呼ばれ,統一体が想定できる「北ゲルマン語」と合わせて,1〜3 世紀頃のゲルマン語はこの 5 つの集団だったことに

[23]「フランク人」(Franks) と「フランケン人」(ド Franken) はそれぞれ英語とドイツ語によるが,英語圏の人々を指す名称ではないので,「フランク王国」などの固定した術語を除いて,「フランケン」というドイツ語による名称を用いる。注 20 参照。

なる。

マウラーの学説は近年，ますます支持を集め，定着しつつあるように思われる。以下の古語にかんする解説は，これに依拠して進めることにしよう。

3.2. 古ゲルマン諸語の発達 ── 分岐と収束による変遷

古ゲルマン諸語の一覧表をもう一度，ご覧いただきたい。ここでは，ゲルマン祖語から古ゲルマン諸語が一方的に「分岐」（divergence）する形になっている。このように，祖語から後代の諸言語への発達を木の枝分かれにたとえる考え方を「系統樹説」（family-tree theory）という。わかりやすく図式化できるので広く行われているが，祖語の下位グループは文献以前の時代にかならずしも単一の言語だったわけではない。前述のように，西ゲルマン語は初めから下位言語群の集合だったとされている。言語の発達には，接触による影響関係や「収束」（convergence）も考慮する必要がある。そこで提出されたのが「波紋説」（波動説 wave theory）である[24]。池に落ちた石が波紋を広げるように，祖語の特徴は後代に受け継がれていく。しかし，一部に別の波紋が広がると，隣接言語に影響を与え，新たな展開を生むことがある。

具体例で説明しよう。標準ドイツ語の母体となった古高ドイツ語は，ヴェーザー・ライン川ゲルマン語（現在の中部フランケン方言などを含む中部方言を指す「中部ドイツ語」）とエルベ川ゲルマン語（現在のアレマン方言・バイエルン方言などを含む南部方言を指す「上部ドイツ語」）の 2 グループにまたがっている。一方，現在のドイツ語圏の北部方言を指す「低地ドイツ語」に下った古ザクセン語は，歴史的に北海ゲルマン語に属し，かつてはドイツ語とは別の言語だった。ドイツ語は西ゲルマン語の古語の 3 グループを内包しているのである[25]。

---

[24] 系統樹説は前述のシュライヒャーによって唱えられた。波紋説は，その弟子でドイツ人のシュミット（Johannes Schmidt 1843〜1901）が提唱した。

[25]「低，低地」，「中，中部」，「上部」，「高，高地」とは緯度ではなく，海抜の高低を示し，この順番でドイツ語圏北部，中部，南部，中・南部を指す。

一方，オランダ語は内陸ゲルマン語に属する「古低フランケン方言」（オ Oudnederfrankisch）を標準語の母体とする。オランダ北東部を流れるエイセル川（オ IJssel）以北のオランダ語方言は「低地ザクセン方言」（オ Nedersaksisch）と呼ばれ，古ザクセン語から発達したので，歴史的に北海ゲルマン語に属している。この部分はたしかに現在の低地ドイツ語に連なっているが，オランダ語全体を低地ドイツ語の一種とする記述は正しくない。これは「高地ドイツ語子音推移」を過度に重視することによる弊害である。標準オランダ語はヴェーザー・ライン川ゲルマン語に連なる中部フランケン方言を母体としており，本来，中部ドイツ語に近いのである。

古語から現代標準語への発達は，地理的に一貫して起こるとも限らない。日本語でも，標準語の母体は関西から関東に移動している。古英語（700〜1100）の中心は，初期には南東部のケント，7 世紀初めは北部のノーサンブリア，8 世紀には中部のマーシア，9 世紀からは南西部のウェセックスのウェスト・サクソン方言に移った。そして，1066 年の「ノルマン征服」（Norman Conquest）による大変革後，14 世紀以降は本来，イーストサクソン（East-Saxon）王国，すなわちエセックス所属のロンドン首都圏に落ち着いた。しかも，現代社会を席巻（せっけん）しているのは，遠く大西洋を隔てたアメリカ英語である。

ドイツ語についても，文献の出所から見た広域共通語の萌芽は，古高ドイツ語（ド Althochdeutsch 750〜1050）期の 9 世紀には中西部の中部フランケン方言，中高ドイツ語（ド Mittelhochdeutsch 1050〜1350）期の 13 世紀初頭には南西部のアレマン方言だった。その後，中心地を欠く初期新高ドイツ語（ド Frühneuhochdeutsch 1350〜1650）期以降，東中部の上部ザクセン方言を中心に各地の特徴を取り入れ，新高ドイツ語（ド Neuhochdeutsch 1650〜）期に収束していった。オランダ語でも，リンブルフ，フランドル，ブラーバント（オ Brabant），ホラントの地方順に南東から北西に中心地が移動した。

一般に古語は複数の下位言語の総称であり，ひとつのテキストでさえも複数の言語的特徴が混ざっていることがある。現存するテキストは原写本を後代に書き直したり，他の方言への不十分な翻訳の場合がある。古高ドイツ語

と古ザクセン語の混成による『ヒルデブラントの歌』や古高ドイツ語（古中部フランケン方言）から古オランダ語（古低フランケン方言）への漸次的な翻訳である『ヴァハテンドンク詩篇』がその例である。古語の文献は量的にもジャンル的にも限られており，文体と語彙の面でも制約が強い。古語の扱いには現代語とは異なる方法が求められる。

「方言」(ド Dialekt) という用語も，かつての歴史比較言語学では祖語から発した同系の諸言語を指していた。古くはこの基準に基づいて，英語とドイツ語をゲルマン語の「方言」としていることがあるので，注意を要する。なお，本書でも古語の下位分類には「方言」という用語を用いることがある。

とはいえ，古ゲルマン諸語は現代語よりも相互の類似性が高い。文法体系は基本的に同一で，語彙も似通っている。音韻体系の微細な差異を分け入れば，かなり類推がきくので，どれかひとつを学べばいい。現代語と違って，会話ができる必要もない。古語の理解を妨げるのは，時空を隔てることで生じた言語構造以外の要因であることが多い。現代語を習得したら，ぜひその古語も学んでみたい。

4．東ゲルマン語 ── オーダー・ヴィスワ川ゲルマン語の興亡

4.1. 東ゲルマン語の諸部族 ── 地名が教える移動の軌跡

ここからは，個々の古語を取り上げてその実体を見ていこう。

まず，光射す東方から始めよう。東ゲルマン語またはオーダー・ヴィスワ川ゲルマン語の話者は，最も遠方まで移動した。しかし，どの移動先も人口の多い文化的先進地域であり，周囲の大国に滅ぼされ，同化されて，すべて死語となっている。まとまった文献を伝えるのは，4 世紀のゴート語だけである。「ゴート」という名称も，中世北方建築様式を指す「ゴシック様式」や近世の太字の活字体である「ゴシック体」という用語を除いて，歴史の舞台から姿を消した。

この場合に有益なのは，「固有名詞論」(onomastics) に基づく地名の歴史的考察である。「ゴート人」(Goths)，「ブルグンド人」(Burgundians)，「ヴァンダル人」(Vandals) などを含む東ゲルマン人諸部族の故地は，スカンジナ

ヴィア南東部とされている。ゴート人の名前はスウェーデン領のゴットランド島（ス Gotland,「ゴート人の土地」の意味）に残り，おそらくスウェーデン南部地方の総称イェータランド（ス Götaland）とその中心都市イェテボリ（ス Göteborg）とも関係がある。ゴート人は紀元前 100 年頃に故地を離れ，バルト海対岸のオーダー川東側からヴィスワ川下流地域にかけて移住し，ヴァンダル人などを駆逐した。東ゲルマン語を「オーダー・ヴィスワ川ゲルマン語」とも呼ぶのはこのためである。ポーランドの港湾都市グダニスク（ポ Gdańsk＜Gothiscandza，ド Danzig「ダンツィヒ」）もゴート人にちなんだ名称である。

ブルグンド人もゴート人に続いて故地を離れ，デンマーク領ボーンホルム島（デ Bornholm＜古ノ Borgundarhólmr,「ブルグンド人の小島（hólmr）」の意味）を経て，413 年にライン河畔に進出し，ドイツ中部の古都ヴォルムス（ド Worms）を都とした。しかし，中央アジア出身の遊牧民で非印欧語族のフン族（Huns）から壊滅的打撃を受けた。その間の経緯は，中世ドイツ英雄叙事詩の傑作『ニーベルンゲンの歌』（ド *Nibelungenlied* 1200 頃）の素材ともなっている。その後，フランスのブルゴーニュ地方（フラ Bourgogne＜Burgundia,「ブルグンド人の土地」の意味）を含むローヌ川とソーヌ川流域に王国（443〜534）を建てたが，西ゲルマン語話者のフランケン人に滅ぼされ，吸収された。

ヴァンダル人もゴート人に続いて故地を離れ，スペインを経て北アフリカのカルタゴにまで版図（429〜534）を広げたが，東ローマ帝国に滅ぼされ，吸収された。複数の部族集団の総称といわれているが，*Wandal- の名称は「さすらう」という意味の英語の wander，ドイツ語の wandeln/wandern と同源であり，まさに「さすらう者，移動する者」の原義にふさわしい。デンマークのユトラント半島北部ヴェンシュセル地方（デ Vendsyssel,「ヴァンダル人の（Vends-）行政区（syssel）の意味」），スペイン南部のアンダルシア地方（スペ Andalucía＜Vandalicia,「ヴァンダル人の土地」の意味）にもその痕跡が見られる。

4.2. ゴート人の盛衰 ── 東ゴート人と西ゴート人

ゴート人は 2 世紀半ば頃にヴィスワ川下流地域を離れて，170〜200 年頃に黒海北部沿岸に移住し，東西のグループに分かれた。「東ゴート人」(Ostrogoths) はサルマティア（ラ Sarmatia，現在のウクライナ）のドニエプル川下流地域(200 頃〜433)に及んだ。「西ゴート人」(Visigoths，Visi-「良い，高貴な(？)」)はその西側，ドニエストル川以西からドナウ川までのダーキア（ラ Dacia，現在のルーマニア，200 頃〜375）に侵入し，270 年以降はローマ帝国からこの地を奪って居を定めた。ローマ帝国と接触したゴート人たちは，襲撃と略奪行為から次第に平和的関係に転じた。後述するウルフィラが活躍したのは，この時期にあたる。

375 年に上述のフン族が襲来すると，東ゴート人はその支配に屈した。西ゴート人は同年，ドナウ川を越えてローマ帝国に庇護を求め，これが本格的な民族大移動の契機となった。ヴァンダル，ブルグンド，フランケンなどの部族も，395 年のローマ帝国東西分裂の混乱に乗じて，ライン，ドナウの 2 大河川を結ぶ防護壁「リーメス」（ラ limes）を乗り越えて乱入し，476 年の西ローマ帝国崩壊をもたらした。東ゴート人はパンノニア(ラ Pannonia，現在のハンガリーとその周辺，433〜471)，バルカン半島を経て 489 年にイタリアに侵入した。同地ではゲルマン人のオドアケル（Odoacer 433 頃〜93）を倒して東ゴート王国（493〜535）を築いたが，東ローマ帝国に滅ぼされ，吸収された。西ゴート人は 4 世紀末にギリシャに攻め入り，5 世紀初めにはイタリアに移動してローマを占領した (410)。その後，ガリア南部 (419) を経て，ヴァンダル人に代わってスペインに西ゴート王国を 2 度にわたって建設したが（419〜507 首都トローサ（現在のトゥールーズ），507〜711 首都トレド），ウマイア朝のアラブ人に滅ぼされた。

4.3. ウルフィラとゴート語聖書 ── クリミアゴート語まで

「ゴート語」(Gothic) はゲルマン語最古のまとまった文献を残す貴重な言語である。その大部分を占めるのが，ウルフィラ (Wulfila，wulfs「狼」＋指小接尾辞 -ila,「かわいい狼」の意味，ラテン語形　Ulfila(s)，311 頃〜382/3)

による聖書の翻訳である。

ウルフィラは，西ゴート人の父親とカッパドキア出身のギリシャ人奴隷の孫でキリスト教徒だった母親との間に，ダーキアで生まれ，ゴート語とギリシャ語に通じていたといわれている。エジプトのアレクサンドリアと並ぶ学芸の中心地だったシリアのアンティオキアに学び，弱冠 30 歳頃の 341 年に異例の昇格で初の西ゴート人司教に任ぜられて，ゴート人に布教活動を行った。その西ゴート語訳聖書は東・西ゴート人だけでなく，他の東ゲルマン人部族にも理解され，改宗に寄与したといわれている。しかし，キリスト教をゴート人伝来の価値観への脅威とみなし，ローマ帝国との友誼(ゆうぎ)関係を嫌う西ゴート人の一派から迫害を受け，348 年にドナウ川南岸に渡ることを余儀なくされた。ローマ帝国領モエシア（ラ Moesia，現在のブルガリア北部）に定住を許されたウルフィラと信者たちは，「小ゴート人」（ラ Gothi minores）と呼ばれ，平和に暮らしたと伝えられている。その間の事情は，東ゴート人のヨルダーネース（Jordanes）による 6 世紀半ばのゴート人の歴史にかんする著書に記されている。ゴート人と東ゲルマン人諸部族は，三位一体の教えによる父なる神とその子キリストの同一性を受け入れず，神を王，キリストを王子にたとえるゲルマン人の理解にかなった中道的アリウス派を奉じた。そのため，ウルフィラは晩年に異端者の宣告を受け，異議申し立てのためにコンスタンティノープル（現在のトルコ領イスタンブル）に赴いたが，カトリック側の妨害工作にあい，無念のうちに同地で病没した。

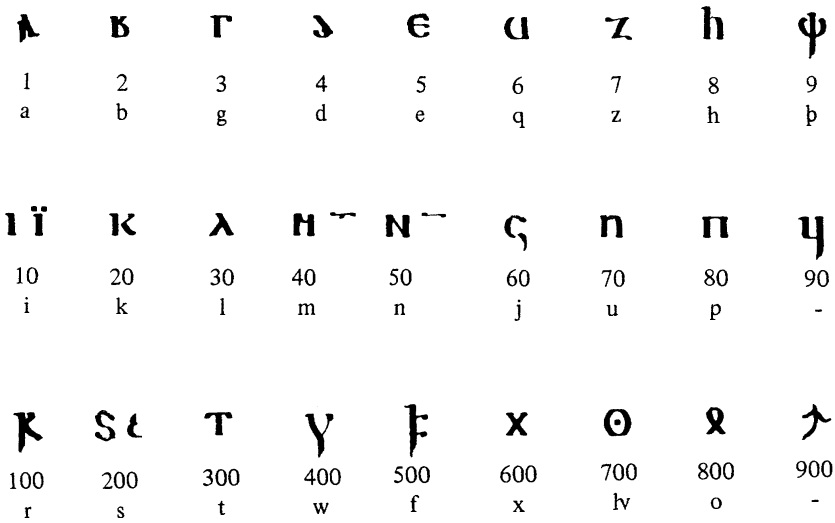
ウルフィラはゴート人の戦闘性への懸念から，旧約の『列王記』を意図的に除いて，推定で 350〜380 年頃の間に聖書の全訳を完成した。ただし，現存するのは，四福音書の大部分とパウロの書簡からなる新約聖書の約 4 分の 3 にとどまる。ゴート語聖書は 4 世紀末のラテン語完訳「ウルガータ」（ラ Vulgata）に続く，最古期の印欧語による翻訳聖書である。文字の創出を含めて，時代的にこれに比肩する偉業には，301 年に世界初のキリスト教国家となったアルメニアの聖メスロプ（Mesrop 362 頃〜440）によるアルメニア文字の創出と，弟子たちと共同で 410 年頃に完成させたアルメニア語聖書がある。

ゴート語聖書の原本は残っていないが，イタリアに東ゴート王国を築いたテオデリクス王(ラ Theodericus 454 頃〜526)の手に渡り，その命を受けて，おもに北部のラヴェンナ（イ Ravenna）の都で数巻の写本に筆写された。とくに重要なのは，四福音書の大部分とパウロの書簡の翻訳を含む『銀文字写本』(ラ *Codex Argenteus*)である。紫色に染められた羊皮紙に銀色ないし金色の文字を連ねた豪勢な装丁で，500〜550 年頃の間に作られたとされている。同写本は約千年の後，16 世紀半ばにドイツのライン河畔に位置するヴェルデン（ド Werden）の修道院で発見された。プラハの神聖ローマ帝国の王宮を経て，三十年戦争 (1618〜48) の動乱期にスウェーデンのウプサラ (ウップサーラ，ス Uppsala) 大学に運ばれ，近年の盗難事件以来，厳重に保管されている。羊皮紙 336 枚中，188 枚が確認されている。

ウルフィラが典拠としたギリシャ語原典は，東ローマ帝国で公認され，広く流布した「ビザンティン本文」の一種といわれているが，正確には特定できない。忠実な逐語訳のために，語順などの面でゴート語の独自性を過度に期待することは困難だが，ゲルマン語の古い特徴をよくとどめ，印欧語歴史比較言語学でも重要である。そのほかの資料は，ウルフィラが考案したゴート文字で書かれた著者不明の『ヨハネ伝福音書注解』(略称「スキーリーンス」，ゴ *Skeireins aíwaggēljōns paírh Iōhannēn*）の断片など，数点にとどまる。

ウルフィラはゴート人のために文字を考案した。27 文字（「90」と「900」を表す 2 文字は数字専用）からなり，ギリシャ文字と同様に，ゼロを除く 1〜9，10〜90，100〜900 の数字 (両肩に点「˙」を添えて表す) を兼ねている。この「ゴート文字」(Gothic alphabet) はギリシャ文字の丸みを帯びた大文字書体である「アンシャル体」(uncial) を基礎として，ラテン文字 (h「8」，r「100」，s「200」，f「500」) とおそらくルーン文字 (u「70」) を加えている。大文字と小文字の区別はない。テキストではラテン文字に転写するのが慣例である。英語の無声の th [θ] に相当する音(おん)は，ギリシャ文字の Θ「テータ」ではなく，Ψ「プシー」に相当する文字で表している。転写する場合には，th よりも，ルーン文字に由来するþ「9」，英語名ソーン (thorn) の文字をあてることが多い。印欧祖語の k^w に相当する/h^w/の音(おん)には，ギリシャ文字の O

「オミクロン」の中に摩擦音を示す中黒点（•）をつけて表す。転写する場合には，ゴート語研究者が創作した ƕ「700」の文字をあてる。「90」（koppa）と「900」（sampi）の文字は数字専用（下図 Bennett 1981 (1960): 123）。



各文字の推定音には異論があるが，ひとつの目安として一覧表にまとめておこう。文字表記は「＜　＞」で示し，母音字には補助記号「´」，「¯」を添える。長母音 ē，ō はあるが，短母音 e，o はない（7.4.）。

	短母音		長母音		二重母音
狭	/i/〈i〉	/u/〈u〉	/iː/〈ei〉	/uː/〈ū〉	/iu/〈iu〉
半狭			/eː/〈ē〉	/oː/〈ō〉	
半広	(/ɛ/〈aí〉)	(/ɔ/〈aú〉)	/ɛː/〈ai〉	/ɔː/〈au〉	
広	/a/〈a〉		/aː/〈ā〉		(/ai/〈ai〉), (/au/〈au〉)

子音：		唇音	歯(茎)音	軟口蓋(声門)音	唇軟口蓋(声門)音
閉鎖音	無声	/p/〈p〉	/t/〈t〉	/k/〈k〉	/kʷ/〈q〉
有声		/b/〈b〉	/d/〈d〉	/g/〈g〉	/gʷ/〈(g)gw〉
摩擦音	無声	/f/〈f〉	/s/〈s〉, /θ/〈þ〉	/x/〈g〉, /h/〈h〉	/hʷ/〈ƕ〉
	有声	/ß/〈b〉	/z/〈z〉, /ð/〈d〉	/ɣ/〈g〉	
鼻音		/m/〈m〉	/n/〈n〉		(/ŋ/〈g(g/k/q)〉)
流音			/l/〈l〉, /r/〈r〉		
半母音		/w/〈w〉	/j/〈j〉		

東ゴート人は 258 年にクリミア半島に到達したが，この地では長らく「クリミアゴート語」(Crimean Gothic) が生きていた。16 世紀に当地に漂着したニュルンベルク商人一行は，ドイツ語によく似た言語を話す若者に遭遇したと証言している。資料としては，神聖ローマ帝国の外交官として，オスマン・トルコ帝国下のコンスタンティノープルに派遣されたフランドル人オヒール・ヴァン・ビュスベク（オ Ogier van Busbeque）が 1560〜62 年にクリミア出身の 2 人の話者から採集した 100 余りの語形しか残っていない。

5．北ゲルマン語 ── スカンジナヴィアとその周辺

5.1. 北ゲルマン語の故地 ──「スカンジナヴィア」の由来

言語的にも地理的にもまとまりが明確なのは，北欧の北ゲルマン語である。近代以前の北ゲルマン語を伝統的に「ノルド語」(Nordic) という。その故地「スカンジナヴィア」(Scandinavia) の起源は何だろうか。この名称は古代ローマの歴史家，大プリニウス（Plinius 23〜79）の『自然誌』（ラ *Historia Naturalis*）に「バルト海の大きな島」として初めて登場するラテン語の Scadināvia と，スウェーデン南端地域の「スコーネ」（ス Skåne）の前身である Scānia（古ノ Skáney）との「混交」(contamination) による。これはノルド祖語の *skaðinawjō と同源で，「害，損失」(*skaðin-，ド Schaden) を与える「島，水辺の土地」(*awjō，デ ø，ド Aue) の意味である。デンマークとスウェーデンを分けるエーアソン海峡（デ Øresund）は岩礁や砂州が多

く，たびたび船が座礁したことに由来するとされている。

5.2. ルーン文字 ── 起源，素材，用途

北ゲルマン語には，ゴート語聖書に先駆けたゲルマン語最古の断片的資料が残っている。「ルーン文字」（runes，runic alphabet）で刻まれた「ルーン銘文」（ルーン碑文，runic inscription）がそれである。年代の査定には諸説があるが，遅くとも 200 年頃にさかのぼり，成立は 1 世紀前半と推定されている。総数は 6,500 点余りで，故地のスカンジナヴィアに集中し，8 世紀末以降のヴァイキング活動による遠征地での出土はそれほど多くない。スウェーデン約 3,600，ノルウェー約 1,600，デンマーク 850 弱を数え，イギリス 90 弱，ドイツ約 80，オランダ約 25，アイスランド 100 弱，グリーンランド 100 強，オークニー諸島約 50，フェーロー諸島約 10，アイルランド 16 と続き，ロシア，ビザンティン，アラブ圏にも残っている[26]。以前は，イタリア北部で非印欧語族のエトルリア人が用いていた古いラテン文字を，現地で接触したゲルマン人が独自の創造を交えて借用したとする意見が多かった。しかし，近年では，ゲルマン人の原郷の中心地でローマ帝国との接触が密接であり，最初期の資料も多いデンマークのユトラント半島南部とする説が有力である。

一般に「ルーン碑文」といわれることが多いのは，後述する新ルーン文字による大規模な石碑を連想するためだろう。初期には製作者の名前を記した 1 語か 2 語のものが多く，断片的で数語の短文にとどまる。大文字と小文字の区別はなく，語の切れ目も明示せず，左から右に書くことが多いが，逆の方向もあり，一定しない。牛が犂（すき）を引いて畑を耕すように，左から右へ，右から左へと連ねていく書き方を「牛耕(書)式」（boustrophedon writing）という。この方式は上述のエトルリア人によるラテン文字資料にも見られる。

初期の出土品には，耐久性にすぐれ，携帯可能な富裕層の所有物と思われる金銀を素材とした装身具，装飾品，武器，護符が多い。5 世紀頃からは移

[26] Düwel（2001³：3）参照。

動不可能な岩にも彫られ，墓碑や記念碑も残っている。しかし，現存する資料は稀な例であり，最初期には日常的素材であるブナなどの木片に刻まれたらしい。ルーン文字が木目と紛れやすい水平線や刻みにくい曲線を避け，縦の直線を基本として，交差する斜めの直線だけからなっているのはこのためである。ゲルマン語では「本」(英 book，ド Buch) あるいは「文字」(ゴ bōka) と「ブナ」(英 beech，ド Buche) を表す語が同源だが，このこととも関係がある。木片は文字を刻みやすく，膨大な数に及んだと推定されるが，櫛(くし)などに使った骨とともに朽ち果ててしまったと考えられ，数点しか残っていない。これは木材の保存に適した泥炭地層からなる沼沢地(しょうたくち)で見つかった。ゲルマン人は沼を神聖化し，遺品を葬る習慣があった。荒涼とした沼地は考古学的宝庫なのである。

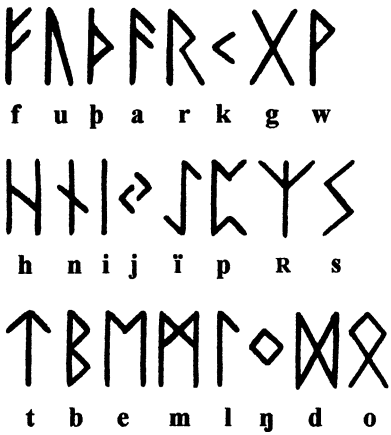
「ルーン」(古ノ rún) とは「秘密，ささやき」の意味を表す。従来は，神秘主義的解釈の偏向もあって，ルーン文字は超自然的な力を備え，呪術や宗教的儀礼に用途が限られたと説かれていた。しかし，言語をつづる行為が稀で少数のエリートに限られた社会では，文字には神秘的な性格がつきものである。「ささやき」という意味は，音を発しない文字の性質を暗示しているという意見もある。神秘的な力を付与されたならば，ラテン文字ではなく，前例のない字形を取るほうが自然だろう。各文字は正確に音価と対応しており，実用性が念頭にあったことは疑いない。失われた最初期の木片や骨に刻まれた銘文には，日常的な通信内容が多かったにちがいない。

5.3. 古ルーン文字 ── 24 文字の「古フサルク」と初期ルーン語

200～700 年頃のルーン文字を「古ルーン文字」(older runes) または「古フサルク」(older futhark) という。資料は 350 点余りで，古ゲルマン語圏すべてに及んでいる。200 点弱の短い銘文のほかに，装飾文字として個々の文字を刻印した円形状の薄い黄金片で，装身具に用いた 160 点弱のブラクテアート (bracteate 450 頃～550 頃) がある。文字は個人の創作によることが多いが，これほど広く流布しながら，この時期のルーン文字はかなりの均一性を示している。

古ルーン文字は 24 文字からなっている。ラテン文字とは別の配列がなされ，8 文字を 3 列に並べて構成されていることが銘文例から知られている。

各文字の順番を示す数字を添えて列挙してみよう（下図 Bandle et al. (eds.). 2002: 634 一部変更）。



第 1 列	1. f	*fehu「家畜，動産」
	2. u	*ūruz，*uruz「水牛」
	3. þ（＝th）	*þurisaz「巨人」
	4. a	*ansuz「アース神族」
	5. r	*raidō「車，騎馬」
	6. k	*kaunan（？）「潰瘍（かいよう），病気」
	7. g	*gebō「賜物」
	8. w	*wunjō（？）「至福」
第 2 列	9. h	*haglaz，*haglan「雹（ひょう），霰（あられ）」
	10. n	*naudiz「欠乏，困窮」
	11. i	*īsaz「氷」
	12. j	*jēran，*jāran「年，豊年」
	13. ï（ė）	*īwaz「イチイの木」

	14.p	*perþō（？） 意味不明，果樹の名前か
	15.z（＞R）	*algiz「ヘラジカ」
	16.s	*sōwilō「太陽」
第3列	17.t	*tīwaz「テュール神」
	18.b	*berkanan「樺の木の小枝」
	19.e	*ehwaz「馬」
	20.m	*mannaz「人間，男」
	21.l	*laukaz，*laguz「水，湖」，「ネギ」
	22.ŋ（＝ng）	*ingwaz「イング神（＝豊穣の神の名）」
	23.d	*dagaz「日」
	24.o	*ōþalan，*ōþilan「遺産」

「フサルク」（fuþark，þ＝th）とは，ギリシャ文字の最初のアルファ（α）とベータ（β）を取って「アルファベット」というように，最初の6文字の音価（f，u，þ，a，r，k）による名称である[27]。ほとんどがラテン文字の大文字に対応している。2.u はV（＝U）を逆にしたもので，6.k はKではなく，Cをもとにしている。3.þ（＝th）は英語の th［θ］の音（おん）を表す。7.g と 15.z（＞R）は音価は別として，ギリシャ文字のX「キー」とΨ「プシー」に似ている。8.w，13.ï（ė），14.p，22.ŋ（＝ng）はどちらの文字にも対応せず，8.w と 22.ŋ（＝ng）はラテン語とギリシャ語にはない文字の音価を表す。13.ï（ė）は音価の解釈に異論があり，余剰的とされることもある。14.p は使用自体が稀である。ラテン語にない「母音↔半母音」の区別も 11.i↔12.j，2.u↔8.w で示している。

個々の文字には名称があり，ルーン文字を題材にした中世期の4編の詩などをもとに，ゲルマン祖語の語形を再建して解釈されている。14.p の *perþō は意味不明で，21.l には*laukaz「ネギ」と*laguz「水，湖」の解釈がある。各文字の名称は語頭音に従う「頭音法」（acrophony）の原則で選ばれている。

[27] 古英語のアングロサクソン型ルーン文字は「フソルク」（fuþorc）という。

これはラテン文字でも同様で，A「アー」，B「ベー」はギリシャ語の「アルファ」（α），「ベータ」（β）を経由して，セム語族に属するヘブライ語の文字の āleph「牛」，bēth「家」の語頭音にさかのぼる。語頭に現れない 15.z（＞R）の algiz「ヘラジカ」と 22.ŋ（＝ng）の ingwaz「イング神（豊穣の神の名）」には，語末または語中に含まれる語をあてている。語末にしか出ない 15.z はロータシズムで r の音（おん）になったと考えられ，R という後代の形で示すこともある[28]。ただし，本来の r を表す 5.r と区別されているので，/z/＞/r/の移行段階にあり，チェコ語の ř（例　Dvořák「ドヴォルザーク（＝ドヴォジャーク）」）のような口蓋化した r の音価［ř］だったとも推定されている。後述する新ルーン文字にはこの文字はなく，古ノルド語では r に移行している。母音字は，短母音専用だったとも推定されている 19.e を除いて，短母音と長母音の両方を表したらしい。

文字の名称は，2.u の*ūruz，*uruz「水牛」＞「男性の（生殖）力」，21.l の*laukaz「ネギ」＞「豊穣，媚薬（びやく）」のように，かつてはキリスト教以前のゲルマン人の世界観を代表していると拡大解釈されることがあった。現在では文字の音価を記憶する手段として，頻度の高い身近な概念が選ばれたと考えられている。そのため，音韻変化が起こっても文字の名称は変わらず，音価が変更された。たとえば，4.a の*ansuz「アース神族」は「n＋摩擦音 s」の前で a が鼻音化して a^nsaz となり，鼻母音/a^n/を表すようになった。一方，12.j の*jēran「年，豊年」（＞*jāra，英　year）は，語末の「n の脱落」に加えて，600 年頃に語頭の j- が消えて āra（ア　ár）となり，口母音/a/を表すように変わった[29]。

---

[28] この z は s の有声音だが，「ヴェアナーの法則」との関係ははっきりしない。

[29] a^nsaz は「n の脱落」を補う「代償延長」（compensatory lengthening）で長母音 á/アー/になり（古ノ　áss/アース/），円唇化で ó/オー/に変化したので（古ノ　óss/オース/，古英　ōs，ス　ås），後述する新ルーン文字の時代には o を表すようになった。古英語のアングロサクソン型ルーン文字を「フソルク」と呼ぶのは，このためである。

推定音は次のようになる。文字表記は「〈　〉」で示す[30]。

	短母音	長母音	二重母音
狭	/i/〈i〉　/u/〈u〉	/i:/〈i〉　/u:/〈u〉	iu〈iu〉
	/e/〈e〉　/o/〈o〉	(/e:/〈e〉)　/o:/〈o〉	eu〈eu〉
広	/a/〈a〉	/a:/〈a〉	ai〈ai〉, au〈au〉

子音：		唇音	歯(茎)音	軟口蓋・声門音
閉鎖音	無声	/p/〈p〉	/t/〈t〉	/k/〈k〉
有声		/b/〈b〉	/d/〈d〉	/g/〈g〉
摩擦音	無声	/f/〈f〉	/s/〈s〉, /θ/〈þ〉	/h/〈h〉
有声		/v/〈v〉	/z/〈z(＞R)〉	/ɣ/〈g〉
鼻音		/m/〈n〉	/n/〈n〉	(/ŋ/〈ng〉)
流音			/l/〈l〉, /r/〈r〉	
半母音		/w/〈w〉	/j/〈j〉	

以前はこの時期を「ノルド祖語」(Proto-Nordic) と呼び，最初期の北ゲルマン語とみなすことがあった。しかし，200〜500 年頃のルーン文字資料は北ゲルマン語と西ゲルマン語への分岐以前の特徴を随所に示し，3.1. で述べた北西ゲルマン語とみなす意見が有力である。ただし，フィンランド語に借用された kuninga***s***「王」に残る語尾 -z の保持（*gasti***z**「客」，古ノ gest***r***，ゴ gast***s***）など，西ゲルマン語（古英 ġiest，古高ド/古ザ gast）では失われた北ゲルマン語的な特徴を示すことも事実である。資料的限界のために，「初期ルーン語」(Early Runic) という中立的な名称も提案されており，本書もこ

[30] 長母音/e:/〈e〉の認定には異論がある。Nielsen (2000：104 f)，Faarlund (2008：219) 参照。音価が不明な 13.ï (ė) の母音文字は考慮していない。/ŋ/〈ng〉は/n/＋/g/の連続だった可能性もある。

れに従う[31]。これ以降，ヴァイキング時代(800〜1050)[32]の終焉(しゅうえん)までを「共通ノルド語」(Common Scandinavian 500〜1050) とも呼ぶ。ただし，次に述べる新ルーン文字が現れる 700 年頃，遅くともヴァイキング時代初期の 800 年頃には東西ノルド語への分岐のきざしが芽生えるので，分岐が決定的になるまでの期間を指す便宜的な名称ともいえる。

初期ルーン語の例として，ユトラント半島南部ゲレフース(Gallehus)の村で出土した 400 年頃と推定される有名な『ゲレフースの黄金の角』に刻印された銘文を挙げておこう (下図は後代の複製版画)。語幹形成接尾辞 -i-/-a- と語尾 -z の保持に注意 (gast-i-z; horn-a)。

ekhlewagastiz holtijaz horna tawidō

「私 (ek-)，ホルトの息子 (一族・出身者) の (Holtijaz) フレワガスティル (-hlewagastiz<hlewa-「名声」+-gastiz「客」，英 guest) がこの角を (horna，英　horn(-s？)) 作った (tawidō)」

惜しくも 1802 年の盗難で消失したこの豪華な 2 本の角の製作者は，見事な出来栄えに満足して詩的アレンジを施したのだろう。ゲルマン語最古の「詩」といわれるこの銘文は，2 つの強音部 (斜体字) を持つ短詩行 ({　} で表す) を 2 つ重ねた 1 行の長詩行を形成し ({[ek***h***lewagastiz]+[***h***oltijaz]}+{[***h***orna]+[tawidō]})，「頭韻」(alliteration) を踏んでいる。頭韻とは，アクセントを持ち，意味の中核となる名詞などの同一語頭子音または任意の母音 (あるいはその前の声門閉鎖) の反復による詩行の統一効果を指す。3 番

[31] 北ゲルマン語の時代区分と言語名は各国のナショナリズムもあって一定しない。以下では Haugen (1984) および近年の説も考慮して，筆者の判断で行う。

[32] カッコ内の歴史学あるいは言語史の時代区分の表示では「頃」を省略する。

目の短詩行の最初の ***h***orna を中心に，最初の短詩行の 2 語 Ek ***h***lewagastiz ***h***oltijaz に共通する 3 つの h- がこの効果を生んでいる。

参考までに，ゲルマン祖語と古ゲルマン諸語による人工的な試訳を紹介しよう[33]。

ゲルマン祖語	*ek hlewagastiz hultijaz hurnan tawiđōn
ゴート語	*ik hliugasts hulteis haúrn tawida
古ノルド語	*ek hlégestr hyltir horn táða
古英語	*iċ hlēoġiest hylte horn tāwode

[33] Nielsen（2000：78 f.）参照。

古フリジア語　*ik hlī-iest helte horn tāwade
古ザクセン語　*ik hleogast hulti horn tōida
古高ドイツ語　*ih hleogast hulzi horn zawita

5.4. 新ルーン文字 ── 16 文字の「新フサルク」と前期古ノルド語

古ルーン文字資料に北ゲルマン語的特徴が現れるのは，500 年頃以降である。この時期にはウムラウトや「語中音消失」（syncope）など，重要な音韻変化が生じた。文字体系にも変革が起こり，700 年頃以降のルーン文字はおそらく特定のデンマーク人の発案で，6 ＋ 5 ＋ 5 の 3 列 16 文字で構成されるようになった（f，u，þ（＝th），ą（＞o），r，k; h，n，i，a，s; t，b，m，l，R）[34]。これを「新ルーン文字」（younger runes）または「新フサルク」（younger futhark）という。新ルーン文字は刻印を容易にするために，縦の直線を基調に最小対立で区別されるように簡素化され，同一の高さに統一された。上下 2 本の水平線による帯状の枠内に収められ，方向も左から右に固定された。700～1350 年頃の北ゲルマン語を「古ノルド語」（Old Nordic）と呼ぶが，新ルーン文字資料が多く残されている前半の 700～1050 年頃を「前期古ノルド語」（ド älteres Altnordisch）ということがある。

この時代にはウムラウトの発生で母音（/æ/，/ø/）が増えたにもかかわらず，文字数は減少している。そこで，1 文字が複数の音価を担うことになった。閉鎖音は b，t，k だけで，有声と無声の区別もなく，iklat で England「イングランド」を表すようになった。あいまいで不便な表記のようだが，新しく誕生した音韻をあえて考慮せず，古風な特徴で語形を弁別的に解釈する方針を採用したためともいえる。これは正書法の一般原理にかならずしも矛盾しない。文字数の減少は文字をつづる機会が増え，簡便な表記を求めた結果とも考えられる。

[34] ただし，古英語のアングロサクソン型フソルクは 31 文字に増えた（f，u，þ（＝th），o，r，c［tʃ］，g［j］，w，h，n，i，j，ɨ［i］～［x］，p，x，s，t，b，e，m，l，ŋ，œ，d，a，æ，y，ea，ḡ［g］，k［k］，k̄（k の異形））。

11 世紀半ばには，p，d，g は b，t，k，に点「•」を加えて表し，/e/，/æ/，/ø/ には特殊記号をつけるようになった。新ルーン文字は縦の基調線を受け継ぎ，「長枝型ルーン文字」（ス　långkvistrunor）ともいわれる「デンマーク型」（次図上）と，それを部分的に廃して他の点も簡素化した「短枝型ルーン文字」（ス　kortkvistrunor）ともいわれる「スウェーデン・ノルウェー型」（次図下）に大別される（次図上・下 Bandle et al. 2002: 641）。ただし，その使用地域はそれぞれの地域名とはかならずしも一致しない。広く普及したのは前者で，スウェーデンでも大多数の碑文に採用された。11 世紀初頭には両者を折衷した「ノルウェー型」も発達した。

新ルーン文字の時期は，経済活動と植民活動の一環として周辺諸国に遠征を繰り返した「ヴァイキング時代」（Viking Age 800〜1050）と重なる部分が少なくない。有力者の権力や財産権を誇示し，偉業と悲運を記す目的からも，ときには装飾文様を伴い，彩色もなされ，目立つ場所の大きな岩に彫られることが多くなった。私たちが北欧を旅行して目にする石碑も，この時代のものである。本国から遠く離れた遠征先の各地でも確認されている。ヴァイキング（ア　víkingar「ヴィーキンガル」）の有力者たちは，中世ヨーロッパの貴族と違って識字能力があったといわれており，この時代のルーン銘文の数は飛躍的に増大した。とくにスウェーデンで多く，石碑の数は約 2,500 に及び，中部のウップランド地方（ス　Uppland）で約 1,200 を数える。その大部分はヴァイキング時代の末期に近い 11 世紀に由来する。語数も増え，事跡

を具体的に描写し，最長のテキストは 700 字以上にもなる。ただし，特定の語彙に限定され，常套句を多用するなど規範性が強い。文字数の減少であいまいさが生じても，限られた内容のために理解に支障はなかったと考えられている。

10 世紀末以降，キリスト教の伝来で，ルーン文字はスカンジナヴィアを除いてラテン文字に駆逐された。教会でルーン文字を用いることがあったイギリスでも，11 世紀には消滅した。スウェーデンとデンマークに比べて，ノルウェーとアイスランドではラテン文字の受容が早く，アングロサクソン文化の影響を受けたノルウェーでは 11 世紀後半にラテン文字の文献がある。ルーン文字は羊皮紙には記されなかったが，ラテン文字を知らない民衆の個人的通信手段として 17 世紀まで使われることがあった。西ノルウェーの中心都市ベルゲン（ノ Bergen）では，1956〜67 年の発掘調査で，12〜14 世紀に由来する木片に刻まれた実用的・私的内容の新ルーン文字資料が 600 点余りも出土している。スウェーデン中部のダーラナ地方（ス Dalarna）では，ラテン文字と混合して 19 世紀まで生き長らえたほどである。

5.5. ヴァイキング活動の軌跡 ── 交易，建国，地理上の発見

北ゲルマン人は民族大移動に関与せず，スカンジナヴィア各地に居住地を広げた。しかし， 8 世紀末からは未知の外地に旺盛に進出し，略奪行為を交えて交易を行う「ヴァイキング時代」に入った。

北方では，ノルウェー人ヴァイキングを中心にフェーロー諸島（フェ Føroyar，800 頃），アイスランド（ア Ísland，870 頃），グリーンランド（デ Grønland，980 頃）に及んだ。1000 年頃にはコロンブスの偉業に先駆けて，北米大陸北東海岸部周辺のニューファウンドランド島付近に到達し，「ヴィンランド」（ア Vínland，「ワイン（vín）の国（land）」の意味）と名づけている。

西方では，8 世紀末から 9 世紀前半にシェトランド諸島（Shetland Islands），オークニー諸島（Orkney Islands），ヘブリディーズ諸島（Hebrides），スコットランド，マン島（Isle of Man），イングランド，アイルラ

ンドに及んだ。デンマーク人ヴァイキングを交えたいわゆるデーン人は，1016〜42 年にイングランドを併合してデーン朝を開いた。793 年のノルウェー人ヴァイキングによるノーサンブリア地方の海岸部リンディスファーン島（Lindisfarne）の修道院襲撃に始まる一連の出来事は，古英語で記された『アングロサクソン年代記』に被害者の立場から詳述されている。911 年にはフランス北部にノルマンディー公国を建て，フランス語化した後の 1066〜1154 年には再びイングランドを征服した。デーン人の北ゲルマン語とノルマン人が新たに母語としたノルマンフランス語（Norman French）は，英語史に甚大な影響を与えた。ノルマン人は 11〜12 世紀に北イタリアにナポリ王国，ついでシチリア島を合わせて両シチリア王国を興して栄えた。

東方では，スウェーデン人ヴァイキングを中心にフィンランド，エストニアに進出した。「ルーシ」（Rusĭ）と呼ばれた一行は南東に進み，862 年頃にノヴゴロト公国（ロ　Norgorod,「新しい（nov-）＋町（gorod）」の意味」を建て，これがロシアの起源になった。さらにドニエプル川を下り，882 年には現在のウクライナの首都キエフを都として，キエフ公国を築いた。「ロシア」（ロ Rossija）の国名はスウェーデン人ヴァイキングの名称に由来する。フィンランド語の Ruotsi やエストニア語の Rootsi は「スウェーデン」の意味である。

ヴァイキングの足跡はギリシャ，トルコを迂回してバグダッドに至り，北アフリカにも及んだ。しかし，一連の領土拡張は短命に終わり，今日の言語的痕跡はアイスランドとフェーロー諸島に限られている。

5.6. 古ノルド語の展開 ── 西ノルド語と東ノルド語への分岐

ヴァイキング時代末期には，「西ノルド語」（West Nordic, West Scandinavian）と「東ノルド語」（East Nordic, East Scandinavian）への分岐が顕著になった。東ノルド語の単母音化はその一例である。ヴァイキング活動からノルウェー，デンマーク，スウェーデンの 3 王国形成を経て，ヨーロッパを震撼させたペストの大流行が始まる 14 世紀半ばまでを「後期古ノルド語」（ド jüngeres Altnordisch 1050〜1350）の時代と呼んでいる。

古東ノルド語に属するのは「古デンマーク語」（デ gammeldansk），「古ス

ウェーデン語」（ス fornsvenska），「古ゴットランド語」（ス forngutniska）の 3 言語である。最古のラテン文字による文献には，古デンマーク語では『スコーネ法』（デ *Skånske lov* 1250 頃），古スウェーデン語では『西イェートランド人法』（ス *Västgötalagan* 1225 頃）がある。古ゴットランド語はスウェーデン領ゴットランド島（ス Gotland）の独立した古語で，ゴート語と最も近い関係にあったともいわれている。ルーン銘文のほかに，『ゴットランド人法』（ス *Gutalagan*）を含む 1350 年頃の写本がある。ゴットランド島は経済的・防衛的要所で，帰属先が目まぐるしく変転した。世界遺産の中心都市ヴィースビュー（ス Visby）には，多様な文化的建造物の遺跡がひしめいている。その後は言語としての地位を失い，現在では個性的特徴を備えたスウェーデン語ゴットランド方言（ス gutniska）に下っている。

古西ノルド語は「古ノルウェー語」（ノ gammelnorsk）と「古アイスランド語」（ア forníslenska）からなる。古アイスランド語は中世ヨーロッパで比類なく独創的で豊富な文献を生み，他のゲルマン語圏では失われたキリスト教改宗以前のゲルマン人の世界観を縦横に伝えている。英語名 Old Norse として「古ノルド語」と同義に用いられることも多い[35]。その祖先は 870〜930 年頃の「植民の時代」にノルウェー海岸部からスコットランド周辺の島々とアイルランドを経由して，「トゥーレ」（ド Thule）とも呼ばれた絶海の孤島に渡った人々である。フェーロー諸島への入植と同じくケルト人奴隷を伴い，その数は移住者の 30〜40％を占めたともいわれている。「植民の時代」末期の人口は約 3 万人に達したとされている。「アイスランド」の原語 Ísland［イースランド］は「氷の（ís）国（land）」の意味だが，これには国外移住を戒めたノルウェーの為政者の意図もこめられているといわれることがある。

930 年以降，アイスランドの人々は 2 大陸プレートの裂け目に位置する南西部の世界遺産シングヴェトリル（ア Þingvellir，「会議」（þing）＋「平原」（ア

[35] この場合に「古ノルド語」（Old Norse）は「後期古ノルド語」（1050〜1350）とほぼ同義になる。Norse は「ノルウェー語」を意味するオランダ語 Noors の借用である。一方，Old Nordic は古ノルド語全体を示す。

vellir）の意味）で，毎年夏に 2 週間，国民議会というべき「アルシンギ」（ア Alþingi）を開き，「共和制の時代」（930〜1262）に自由を享受した。12 世紀半ばには古ノルウェー語との相違が明確になり，1200〜1350 年を中心に，それまで口頭で伝えられてきた民間伝承が大量の写本に書きとめられた。散文叙事文学「サガ」（ア saga），北欧神話と英雄伝説の精髄を伝える『エッダ』（ア *Edda*）がその代表である。サガは「王のサガ」，「アイスランド人のサガ」，「古代のサガ」，「司教のサガ」，それに「騎士のサガ」，「メルヒェンのサガ」に大別され，膨大な作品数に及び，現在もテキストの編集が続けられている。ヴァイキング活動による西方拡大の足跡は，アイスランド入植をつづった『植民の書』（古ノ *Landnámabók*），グリーンランドと北米大陸北東海岸部への到達を描いた『赤毛のエイリークルのサガ』（古ノ *Eiríks saga rauða*），『グリーンランド人のサガ』（古ノ *Grænlendinga saga*）など一連の作品に記録され，貴重な歴史的資料になっている。ほかにも法典，歴史書，ノルウェー王の宮廷で活躍したアイスランド人による修辞的・韻律的技巧を駆使した「スカルド詩」がある（「スカルド」（ア skáld「スカウルド」は「詩人」の意味））。14 世紀以降は，日本では未紹介の「リームル」（ア rímur）と呼ばれる韻文による膨大な民謡が伝えられており，2,920 余話に及ぶ民話も収集されている。

以上，北ゲルマン語の歴史的発達をまとめると次のようになる。

初期ルーン語（200〜500）：北西ゲルマン語←古ルーン文字（200〜700）
共通ノルド語（500〜1050）：北ゲルマン語
　古ノルド語（700〜1350）　←新ルーン文字（700〜）
　　←ヴァイキング活動（800〜1050）
　　前期古ノルド語（700〜1050）　←アイスランド，フェーロー諸島などへの植民
　　後期古ノルド語（1050〜1350）　←キリスト教，ラテン文字
　西・東ノルド語への分岐　←ノルウェー，デンマーク，スウェーデンの形成

参考文献（前回に挙げたものは除く）

Bennett, William H. 1981 (1960). *An Introduction to the Gothic Language*. New York. The Modern Language Association of America.

Düwel, Klaus. 2001³ (1968). *Runenkunde*. Stuttgart/Weimar. Metzler.

Einar Haugen. (übers. Magnús Pétursson). 1984. *Die skandinavischen Sprachen*. Hamburg. Buske.

Groenke, Ulrich. 1998. *Die Sprachenlandschaft Skandinaviens*. Berlin. Weidler.

Kuryłowicz, Jerzy. 1973² (1960). “Aspect et temps dans l’histoire du persan (1953)”. in: *Esquisses linguistiques I*. München. Fink. 109-118.

Leiss, Elisabeth. 2000. *Artikel und Aspekt. Die grammatischen Muster von Definitheit*. Berlin/New York. de Gruyter.

Markey, Thomas. 1976. *Germanic Dialect Grouping and the Position of Ingvæonic*. Innsbruck. *Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft*. Bd. 15.

Meillet, Antoine. 1948. “Le genre grammatical et l’élimination de la flexion”. in: *Linguistique historique et linguistique générale*. Paris. Librairie Ancienne Honoré Champion.

Meillet, Antoine. 1949. *Caractères généraux des langues germaniques*. Paris. Librairie Hachette.

Nielsen, Hans Frede. 2000. *The Early Runic Language of Scandinavia*. Heidelberg. Winter.

大城光正/吉田和彦　1990『印欧アナトリア諸語概説』大学書林

角田太作　1991『世界の言語と日本語』くろしお出版

千種眞一　1983「ゲルマン語形容詞の強弱変化について」『東北ドイツ文学研究』27．52-68．

橋本萬太郎　1981『現代博言学』大修館書店

松本克己　2006『世界言語への視座―歴史言語学と言語類型論』三省堂

＊本稿は以下の拙稿の続編である。

「ゲルマン語の歴史と構造 (1)―― 歴史言語学と比較方法 ――」（北海道大学文学研究科紀要 131．pp. 1-40．2010）

「ゲルマン語の歴史と構造 (2)―― ゲルマン祖語の特徴 (1)――」（北海道大学文学研究科紀要 134．pp. 31-67．2011）

＊本研究は科研費（21520425）の助成を受けたものである。

＊誤植訂正：前稿「ゲルマン語の歴史と構造 (2)── ゲルマン祖語の特徴 (1)──」

42 頁　上から 7 行目　*ph_2***t**ḗr-→*ph_2***t**ḗr-

上から 10 行目　*pə***t**ḗr-→*pə***t**ḗr-

59 頁　上から 2 行目　ゼロ＋u →ゼロ＋ŭ（2 箇所）